
ポケットモンスターSPECIAL 虹（レインボー）のトキワの力

松上

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケットモンスター SPECIAL レインボー 虹のトキワの力

【Nコード】

N0978U

【作者名】

松上

【あらすじ】

神様のミスで死んでしまった主人公。

本人は断ったが、神様が無理を言って転生させてくれた。

原作知識が在る主人公は、どんな原作ブレイクをするのか？

その答えは誰にも分からない……

No.0 プロローグ（前書き）

どうも、松上です！

ポケスの小説が無かったので書いてみました！！

頑張りますので応援してください！！

No.0 プロローグ

まずは俺の昨日の事を話させてくれ。

俺は昨日まで普通の中学三年だった。

世間では俺の事を受験生って言ってる。

今の時代、高校に行かない奴が就職できる確立は極めて少ない。

なので、俺も高校に行くために勉強してた、昨日まではだ。

昨日は宿題が沢山あったので夜遅くまで宿題をしていた。

そして、宿題が終わったのは夜の十一時を過ぎていた。

俺は宿題を鞆に入れて直ぐに布団に入って寝た。

そして、目が覚めると白い部屋だった。

最初はまだ夢の中だと思っていた。

だが、幾ら目を覚まそうとしても目が覚めない。

なので俺は一度顔を殴ってみた。

痛みが有った。

なので、誘拐されたと思った。

俺は周りを見渡した。

白一色の部屋

俺が寝ていた時に使っていた枕

土下座しているお爺ちゃん

土下座しているお爺ちゃん？

俺「なあお爺ちゃん、何で土下座してるんだ？」

俺は土下座しているお爺ちゃんに聞いた。

お爺ちゃん「本当にすまんかった！」

お爺ちゃんは俺に謝っていた。

だが何故俺に土下座してるんだ？

俺「何で土下座してるんだ？」

お爺ちゃん「実はな

ワシがお主を殺してしもつたんじゃ。」

・

・

・

・

俺「は？何言つてんだよ？」

マジで何言つてんの、このお爺ちゃん？

俺が死んだって？

冗談にも程があるだろ。

俺は昨日まで普通に生きてたぜ。

不治の病とか、余命が宣告されてたわけじゃない。

普通の中学三年生だぜ。

なのに、何で急に死ぬんだよ・・・

俺が考えていたらお爺ちゃんが話し始めた。

お爺ちゃん「実はな、ワシはお主の世界で言う“神”なんじゃ！」

神様だつて？

OKOK、惚けたんだな、了解だ、突っ込むぜ。

俺「なんd「突っ込むんじゃないぞ。」何故突っ込むのが分かったんだ？」

何で分かったんだ？

お爺ちゃん「ワシが、何でお主の思った事を分かったか考えとるじやろ。ワシは神様じゃ。お主の心の中くらい読めるわい。勿論、お主の事も知っておるぞ。」

・・・このお爺ちゃん、マジで神様だ。

神様「やっと認めたの。マジですまんのお、お主を死なせてしまつて・・・。」

俺「神様なら何で俺を死なせたんだ？」

神様「実は、ワシ等神はお主達人間の寿命などを管理しておるんじゃない。それでじゃな・・・。」

大体分かった。

俺「つまり、神様が俺の寿命に何かして、俺が死んだわくだな？」

神様「そうじゃ、すまんかったな。」

小説ではこういった神様に脅迫したり、襲ったりして能力を貰って転生する奴が多かった気がする。

正直、神様が可愛そうだと思う。

まあ、俺はそんな事しないがな。

それより、俺は天国に行くんだろうか？

それとも・・・地獄？

神様「お主には転生してもらう。お主の様な優しい人間をこのまま死なせとくとワシは死んでも死にきれん。」

神様は死ぬのか？

正直、転生しなくてもいいんだが、神様がさせたいって言うてるからな・・・

俺「それで、俺は何処に転生するんだ？出来るなら長生き出来る世界が良いんだが。」

死んだら嫌だしな。

神様「お主が転生する世界は『ポケットモンスター SPECIAL』世界じゃ。」

マジで？

読んでたけど、まさかその世界に転生するなんて・・・

神様「それで能力は何が欲しいのじゃ？」

俺「ポケモンの世界に能力があつたらダメだろ。」

神様「じゃがのー・・・そうじゃー！！この世界だけの能力があるじゃろー！！確か『トキワの力』じゃったかのー！！この力をお主に授けるぞ。」

確かに能力くれるのはいいんだがよ・・・

俺「その力はトキワシティ出身の奴じゃないと授からないだろ？」

しかも、かなりの低確立でしか授からない力のはずだったよな・・・

神様「それなら大丈夫じゃー！！お主はトキワシティに転生させるからな。」

それなら、矛盾しないな。

神様「この力は確か、使いすぎると眠たくなるじゃったな。じゃが、お主に授ける力はお主の体力が続く限り使えるから安心するんじゃ。しかも、死んでいない限り、お主はそのポケモンを救えるからの。」

俺「分かった、それじゃあ転生させてくれ。」

神様「頑張るじゃぞ。」

神様がそう言うのと俺の体は透け始めた。

俺「じゃあな。」

そして意識が消えそうになった時、神様が慌てて言ってきた。

神様「そうじゃ、お主はイエローと言う少女の隣の家に転生するか

らの!!」

majide?

そう思いながら俺は意識を失った。

No.0 プロローグ（後書き）

次回はキャラ設定です

楽しみに！！

No.1 キャラ設定（前書き）

今回は主人公の設定です

ネタバレを含みますが・・・

No.1 キャラ設定

主人公

レインボー

性別 男

年齢 イエローと同年

容姿 新世紀エヴァンゲリオンに出てくる渚 カヲルを幼く小さくした姿

性格 誰にも優しいが命を大切にしない奴には絶望を見せる

能力 トキワの力

（ポケモンと話せたり回復させたり出来る。普通はこの力を使うと睡魔に襲われ眠ってしまうが、レインボーは体力が続く限り使うことが出来る。しかも、死んでいない限りポケモンを一瞬で回復させる事が出来る。）

備考 神様のミスで死んでしまった人間。

転生に興味が無かったが、神様がどうしてもさせたいと言ったので転生した。

イエローと同年で幼なじみ。

誰にでも優しいが、イエローには（無自覚で）凄く優しくするのでフラグを建てている。

誰にも優しいが、命を大切にしない奴には絶望を見せるまで攻撃する。

また、両親は不慮の事故でレインボーが三歳の時に他界している。

No.1 キャラ設定（後書き）

今回はレインボーがあるポケモンと会います

まあ、楽しみにしていってください！！

No.2 俺と幼なじみとパートナー（前書き）

題名がバカテスの題名みたいですね・・・

まあ、気にしないでください

No.2 俺と幼なじみとパートナー

sideレインボー

よう、久しぶり！！

えっ、誰だか分かんねえって？

ほら、NO.0に出てきた神様じゃない方の奴だ。

ずっと、『俺』『』って話してたから分かんねえかもしれないけど、転生して俺の名前はレインボーになった。

今、俺は五歳になった。

えっ、何で飛ばしたかって？

赤ん坊の頃の事を聞いて何が楽しいんだよ？

あんなの、羞恥プレイってやつだぞ。

使い方があつてるか知らねえがよ。

起きて、母親の母乳飲んで、少し遊んで、寝る。

こんな事聞いたって面白くないだろ・・・

俺は自分の家で昼飯を作っている。

何で昼飯を作ってるかって？

・・・両親が事故で死んだんだ。

その時、俺は家に居たから余り知らないがポケモンが事故を起こしたらしい。

死んだって聞かされた時は泣いたぜ。

第二の親だけど、俺を育ててくれた親に違いはない。

だから、沢山泣いて、泣いて、泣いて、泣いた。

そして決心した。

両親が生きられなかった人生を俺が精一杯楽しむ。

これが、俺の出来る最初で最後の親孝行だ。

親戚の人が『家に来ればいい』と言ってくれたが、俺は断った俺はこの家で過ごしたかったからだ。

それを言ったら皆は分かってくれた。

だけど唯一、分かってくれない人物が居た。
それは・・・

「レイン君、お昼ご飯が出来たから一緒に食べよー!!」

俺のお隣さんで、金髪の髪をポニーテールで纏め、見れば可愛い女の子に分類される俺の幼なじみの

レイン「インターホンを鳴らさずに入ってくるなよ、イエロー。」

イエローだ。

言い忘れてたが、俺のあだ名は『レイン』だから、その所を分かっ
ておいてくれよな。

イエロー「そんな事より、お昼ご飯が出来たから一緒に食べよー!!」

そんな事で済ますイエローは凄いやな・・・鍵を掛けない俺も悪い
けど。

レイン「俺も昼飯は作ったんだけど・・・」

俺は既に炒飯を作り終わって、食べようとしていたのだ。

イエロー「そ、そんなあ」

イエローはその場に座り込んで泣きそうになっていた。

レイン「!? きゅ、急にイエローの家でご飯が食べなくなっ
たなあ。
アハハハハハ」

俺がそう言つとイエローは泣き顔から笑顔になった。

やっぱ人は笑顔でないとな!!
俺はイエローの頭を撫でた。

イエロー「ふにゃー／／／／／」

イエローは顔を赤くしながらも気持ち良さそうな顔をして、俺にもたれかかってきた。

レイン「さ、お腹が空いたからご飯を食べに行こうぜ。」

イエロー「うん!!」

イエローは俺の腕に抱きついて答えてきた。
レッドに恋するよな？

初恋の相手はレッドだよな？
そう思いながら俺はイエローの家に向かった。
まあ、直ぐ隣なんだけどな……

俺はトキワの森に来ている。
え、どうして飛ばしたかった？
ご飯食べるだけの所を聞きたいのか？
まあ、時々イエローが『あーんしてほしい!』って言うてきたくらいだ。

まあ、何時もの事なんだけどな……
イエローの母さんはクスクス笑いながら俺達を見てたけどな。
まあ、回想はこれくらいにしとくぜ。
どうしてトキワの森に来たのか分かんねえよな？

実は俺も分かんねえんだ。

無責任かもしれないが、突然呼ばれたような気がしたんだ。
そして、気が付いたらトキワの森だった。

レイン「これもトキワの力が関係してるのか？」

思い当たる事はこれしかない。

神様から貰った（無理矢理付けられた）トキワの力・・・

ポケモンと話す力を持っているが、それは力を使っている時だ。
俺は今まで力を使った事が無い。

なので、トキワの力が俺を呼んだのかも定かではない。

レイン「取り敢えず億に進んでみますか・・・」

俺はトキワの森の奥に入ってしまった。

レイン「取り敢えず一番奥に来てみたが・・・何もない。」

周りは木、木、木

あとは草むらくらいだ。

此処までポケモンに会わなかった。

それは嬉しい事なんだが、逆に一体とも会わないと気持ちが悪い。

『す・て』

！？

突然、誰かの声が聞こえた。

『た・す・』

その声は弱々しく、今にも消えそうな声だった。

レイン「おい、何処に居る！！俺に何を伝えたいんだ！！」

俺は大きな声で叫ぶ。

『たすけて・・・たすけて』

それは、俺に助けを求める声だった。

レイン「何処だ、何処なんだ！！教えてくれ、トキワの森！！」

俺はトキワの森に叫んだ。

そうすると、トキワの森が風の影響で騒ついた。

“ 真っ直ぐ進めば貴方が望む場所に行ける ”

そんな声が聞こえた。

レイン「あ、ありがとう、トキワの森！！待ってるよ！！」

俺はトキワの森にお礼を言って、前を向いて走った。

レイン「はぁ・・・はぁ・・・お前が俺を呼んだんだな？」

俺はトキワの森の言葉通り真っ直ぐ走った。
そこには沢山のポケモンに囲まれていて、体中に怪我をしていたロコンが居た。

ロコン『・・・たすけにきてくれたの？』

ロコンは目だけを俺に向け、弱々しい声で聞いてきた。

レイン「嗚呼、俺がお前を助けに来た！だから安心しろ！！」

俺はそう言い、ロコンの近くに行き方膝を付いてロコンに手に向けた。

ロコン『！？いや・・・』

ロコンは俺が手をやると怯えながらそう言った。
ポケモン達も俺に攻撃しよう準備した。

レイン「大丈夫だ、俺はお前を救うだけだ。俺はトキワの力を受け継ぐ男だからな。」

俺がそう言うとポケモン達は警戒する事を止めた。
ロコンはまだ体が震えていた。

レイン「大丈夫、必ずお前を救ってやる。」

俺はロコンを抱き抱えそう言った。

ロコンは、俺の言葉を聞くと目を瞑った。
信用してくれたんだろう。

俺は座り、ロコンを足に乗せた。

レイン「安心しろ、必ず救ってやるからな!!」

そう言っただけ俺は手に神経を集中させた。

そうすると、俺の手から七色の光が出てきた。

その光はロコンを覆う。

そうすると、ロコンの傷が無くなっていった。

レイン「……ふうー、無事に治せた。」

俺がそう言っただけ、ポケモン達も安心した顔をした。

マジで無事に治せて良かったぜ。

やっぱ、トキワの力は扱いが難しい。

もっと訓練しないとな……

ロコン『う……うーん……』

ロコンが目を覚ました。

レイン「よう、体の方は大丈夫か？」

体の傷は消えていてもダメージが無くなったかどうかは分からない。
なので、俺はロコンを持ち上げ聞いた。

ロコン『す、凄いよ!!死にそうだったのに体が全然痛くないよ!
!ありがとう……えっと』

体は大丈夫みたいだな。

お礼を言ってくれたらしい名前が分からんようだ。

そりゃそうだ、まだ名乗ってないもん!!

レイン「俺の名前はレインボー、皆からはレインって言われてる。トキワシティ出身で、トキワの力を受け継いだ男だ。」

俺に関する事と言えばこれくらいかな？

流石に転生者って事は黙つとかないとな。

ロコン『レインって言うんだ！！ありがとうね、レイン！！』

そう言つてロコンは俺の頬を舐めてきた。

レイン「どういたしました。それで、何であんなに傷だらけだったんだ？」

いくらポケモン同士の戦いが有ったとはいえ、この森にロコンの弱点である水タイプや地面タイプは生息していない。

なので、あそこまでボロボロだった理由が思いつかない。

ロコン『実は・・・』

ロコンは俺に理由を話してくれた。

だが、理由を聞いて怒りが込み上げてきた。

ロコンはロケット団に襲われたらしい。

ロコンは違う所に居たらしいが、ロケット団が攻めてきてこのトキワの森まで逃げてきたらしい。

逃げる途中で何度も攻撃されたので、使に掛けていた様だ。

ロケット団・・・こんな早い時期から活動してたなんて・・・

レッド達と潰すか？

だけど、俺にはポケモンがいねえ・・・

ダメ元で頼んでみるか・・・

レイン「なあ、ロコン？」

ロコン『どうしたの、レイン？』

レイン「俺のポケモンになってくれないか？」

俺はロコンに頼んだ。

No.2 俺と幼なじみとパートナー（後書き）

次回はテンプレ通り？の展開です

楽しみに！！

No.3 新たな家族と新たな旅立ち（前書き）

今回も話の展開が急です

マジで広ーーーーーい心で読んでください！！

No.3 新たな家族と新たな旅立ち

sideレイン

レイン「俺のポケモンになってくれないか？」

ロコン『うん、いいよ』

そつだよな、今日初めて会った奴に付いてきて……え？

レイン「すまん、もう一度だけ言ってくれるか？」

ロコン『??レインのポケモンになってもいいよ』

majide?

ロコン『これからもよろしくね、レイン』

ロコンはそう言って俺の頬を舐めた。

レイン「あ、ありがとな!!じゃあ、これからもよろしくな!!」

俺はモンスターボールを出した。

『お前はモンスターボールを持っていたのか』と言う突っ込みはしないでほしい。

俺はロコンにモンスターボールをあてた。

ロコンはモンスターボールに入った。

レイン「ゲットだ……出てこい、ロコン!!」

俺はロコンをモンスターボールから出した。

ロコン『今からレインの為に頑張るよー!!!』

ロコンは出てきて、そう宣言した。

トキワのポケモン達は俺達に戦いを挑む事はせず、自分達の住みかに帰って行った。

レイン「さ、ロコン。家に帰ろうぜ!」

ロコン『うん』

俺達は家に帰った。

三日後・・・

イエロー「いやだよお、いかないですよ、れいんくん。」

レイン「泣くなよ、イエロー。一生会えなくなるわけじゃないんだからさ。ただ、少しだけ旅に出るだけだからよ。」

俺は家の前に居る。

今日から俺は様々な地方に旅に出る。

理由は、強くなるためだ。

今の俺は、ポケモンバトルの知識が無い。

なので、旅をして知識を身に付けたい。

イエロー達には、ロコンをゲットした日に言っていた。

そして、旅に出る今日にイエローが泣きだした。

本当は俺も別れたくないんだが、未来に起こるであろう事件に備えるためにそう言うてはいられない。

イエロー「で、でもあ。」

うーん……そうだ!!

レイン「イエロー、俺は約束する。必ず帰ってくる。だから、待っていてくれないか？」

イエロー「や、やくそくだよあ。まってるから、わたしのおねがいをきいてね？」

レイン「嗚呼、必ず帰ってきたら聞いてやる……じゃあ、行ってくる!!」

俺はトキワの森に向かって歩きだした。

イエロー「まってるからねえー!!!!」

俺は手を振りながら歩いた。

ロコン『レイン、最初は何処に行くの?』

モンスターボールの中に入っていたロコンが話し掛けてきた。

レイン「最初はカントーを回ってバトルの知識を覚える。その後は
ジヨウト、ホウエン、シンオウを回って仲間を増やす。時間があれ
ばイッシュに行く予定だ。」

原作までにシンオウまでは回らないといけない。
イッシュは行かなくても良いからな。

ロコン『そうなんだあ・・・頑張ろうね、レイン!!』

レイン「嗚呼!!」

俺達は強くなるために旅に出た。

No.3 新たな家族と新たな旅立ち（後書き）

今回は帰ってきたレインとポケモン達との出会いと設定です

まあ、ネタバレですが・・・

楽しみに!!

No.4 キャラ設定(前書き)

ネタバレだよ・・・

この前、キャラ設定したばかりなのに・・・

ポケモン達のレベルもチートだし・・・

広ーーーーー！！！！！！心を持って見てください！！！！！！

No.4 キャラ設定

名前

レインボー

性別

男

年齢

イエローと同じ年

容姿

新世紀エヴァンゲリオンに出てくる渚 カヲルを小さくした姿

性格

優しい・面倒見が良い・心配性・命を大切にしない奴には非情

能力

トキワの森の力

（ポケモンと話せたり、ポケモンの怪我などを治したり出来る。

普通、この力を使うと睡魔に襲われ眠ってしまうが、レインは体力が続く限り使える。

死んでない限り、ポケモンを一瞬で治す事が出来る。

ポケモンとボールから出さなくても話せる。

トキワの森と話す事が出来る。）

備考

神様のミスで死んでしまった人間。

転生に興味が無かったが、神様がどうしてもさせたいと言ったので

転生した。

イエローと幼なじみ。

誰にも優しいが、イエローには（無自覚で）凄く優しくするのでフラグが建っている。

優しいが、命を大切にしない奴には非情になり、謝られても攻撃を止めない。

原作に介入するためにカントー・ジョウト・ホウエン・シンオウを旅し、ポケモンバトルの知識を学び仲間を集めた。

イエローと約束をしているので、何をお願いされるのか分からないので楽しみにしている。

名前

ロコン

性別

性格

甘えん坊

レベル

67

備考

レインにより救われたポケモン。

レインの事を一番信頼しており、凄く甘えん坊。

寝る時も勝手にボールから出てきて、レインの布団に潜り込んで一

緒に寝ている。

異性としてレインの事が好き。

名前

ラプラス

性別

性格

臆病

レベル

61

備考

レインがカントーを旅している時に会った。

主人に捨てられ、海岸で死にかけていた時にレインに救われた。

命の恩人であるレインについて行こうとしたが、「俺はお礼が目的で助けたわけじゃない。俺が助けたいと思ったから助けたただけだ。」

と言われ、レインにお礼じゃなく自分の意志でついでに行くと言ってレインの仲間になる。

臆病な性格だが、レインの為なら強敵だろうと立ち向かえる。

名前

バンギラス

性別

性格

クール

レベル

72

備考

レインがジョウトを旅している時、ヨーギラスの時に会った。
色んな人間から狙われ、ボロボロになっていた所をレインに救われた。

最初はレインの事を警戒していたが、レインの優しさを知り一緒に旅に出ることを決意する。

レインの為なら体を張ってでも守ろうとする。

名前

ボーマンダ

性別

性格

頑張り屋

レベル

7
6

備考

レインがホウエンを旅している時、タツベイの時に会った。
生まれた時から一人であったので、色んな人間に捕まり売買されて
いた。

監禁されている時、レインがその場所に乗り込んで来て救われた。
レインが自分の為に頑張る姿を見て、一緒に旅に出たいと言い仲間
になる。

レインのポケモンの中でも切り込み隊長。

名前

ルカリオ

性別

性格

勇敢

レベル

5
4

備考

レインがシンオウを旅している時に、偶々出会ったゲンから貰った卵から孵ったポケモン。

ゲンはレインに渡す際、「君は普通の子と違う。君と一緒に居るポケモン達は本当に楽しそうだ。なので、この子を大事に育ててほしい。」と頼んだ。

レインはその言葉に頷いた。

レインのポケモンの中で一番レベルが低いが、ルカリオ自身は気にしていない。

「自分が出来る精一杯の事をする」という気持ちがある。

レインもその気持ちを知っているので、一番応援されている。

名前

グレイシア

性別

性格

寂しがりや

レベル

68

備考

レインがシンオウを旅している時に会った。

元々、棲息地が不明なため沢山の人間にゲットされそうになった。仲間にも追放され、一匹で歩いている所をレインに保護された。

最初はレインの事も自分を捕まえに來た人間だと思い警戒していたが、レインの優しさを毎日触れレインに恋をする。レインに自分からついて行くと行って仲間になる。ロコンとはレイン大好き仲間であり、ロコン同様夜レインの布団の中に勝手に潜り込んでいる。

No.4 キャラ設定（後書き）

次回は帰ってきたレインの話です

楽しみに！！

No.5 帰ってきた男（前書き）

原作はもう少し後です

今回も無理矢理です

広ーーーーい心で読んでください

誤字・脱字があれば教えてください

No.5 帰ってきた男

sideレイン

レイン「・・・何年ぶりだろ？」

俺は丘の上からある町を見て、そう呟いた。

ロコン『でも、此処に帰ってくるのは本当に久しぶりだよね！』

俺の右隣に居たロコンが俺に言ってきた。

グレイシア『此処がレイン君の故郷ですか？』

俺の左隣に居たグレイシアが俺に聞いてきた。

レイン「そうだ此処が俺の故郷だぜ。」

俺はグレイシアを持ち上げて言った。

グレイシア『お、教えてくれて、あ、ありがとうございます／＼／＼』

グレイシアは顔を赤くしてお礼を言ってきた。

ロコン『レイン、私も抱っこしてよ。』

ロコンが俺のズボンを引っ張りながら言ってきた。

レイン「分かったよ。」

俺は 그레이シアを頭に乘せて、ロコンを持ち上げた。

レイン「悪いな、그레이シア。これで良いか、ロコン？」

그레이シア『だ、大丈夫です／＼／＼／＼』

ロコン『う、うん／＼／＼／＼』

何で顔が赤いんだ？

病気じゃないよな・・・
なら大丈夫か。

レイン「それじゃあ行こうぜ！！」

ロコン・그레이シア『うん（はい）！！！！』

俺は目の前にある町に向かった。

レイン「トキワシティ・・・元気かな？」

あいつは元気だろうか？

レイン「早く会いたいぜ、

イエロー。」

俺はイエローの所に向かった。

sideイエロー

イエロー「行つてきまーす!!」

僕はお母さんに挨拶をして外に出た。

レイン君が旅に出て数年が経った。

僕は、レイン君に負けないようにポケモンの事を毎日勉強してる。

手紙が前まで来ていたんだけど、最近は来ないんだ。

だけど、お母さんは最近何時も笑顔でカレンダーを見てた。

何かあるのかな? と思いながら過ごしてた。

「あ、お早ようさん、イエロー。」

僕が走つてると、近所に住んでいるおじさんが挨拶してきた。

イエロー「お早うございます!!」

僕は頭を下げた挨拶をした。

「元気だなあ、まあ今日はあの日だからなあ・・・」

あの日?

イエロー「おじさん、あの日って?」

「!?!い、いや、な、何でもないよ!?!あ、あはははは」

何だろう、凄く気になるなあ・・・

イエロー「それじゃあ、僕は勉強があるんで!?!」

そう言って僕は近くの小川に向かった。

イエロー「あれがポツポで・・・あれがコラッタ。」

僕は小川にいるポケモンの名前を言っていた。

イエロー「はぁ・・・会いたいなあ。」

僕は寝転がって、空を見ながらそう呟いた。

イエロー「レイン君・・・」

僕はその後も空を見続けた。

太陽が西の空に傾いてきた。

イエロー「そろそろ家に帰ろう・・・」

僕は立ち上がって背伸びをして、家に向かって歩きだした。

イエロー「あれ、何でこんなに人がいるんだろう？今日は祭りがあったかなあ。」

太陽は沈んで、暗くなってきたのにトキシシティの人が沢山外にいた。

しかも、皆は同じ方向に向かっている。

イエロー「あ、あのお、今日はお祭りがありましたか？」

僕は近くにいた人に聞いた。

「何言ってるんだ！？あいつが帰ってきたんだよ！！だから、皆はあいつの所に向かってんだよ！！」

あいつって？

「な！？お前マジで言ってるのか？レインボーだよ、レインボー！！あいつが帰ってきたんだよ！！」

え？

「おいお前！！イエローには内緒だろうが！？」

「あっ！？」

「い、イエロー……」

僕は直ぐに家に帰った。

イエロー「お、お母さん……」

僕は家のドアを開けた。

「あら、イエロー……！お帰りなさい……！良いところに帰ってきたわ……」

お母さんが何時も以上に喜んでいた。

「ふうー、気持ち良かったあ。」

お風呂場から声が聞こえた。

僕はゆっくり歩きだした。

ガチャッ

お風呂場の扉が開いた。

そこには、アッシュグレイの耳に掛かるくらいの髪に赤い瞳をし、白い肌をした男の子がいた。

男の子は僕を見ると一瞬驚いた顔をしたけど、直ぐに僕に頬笑んでくれた。

イエロー「レイン君・・・なの？」

僕が聞くと男の子は頷いてくれた。

レイン「久しぶりだな、イエロー。」

数年ぶりに僕が会いたかった男の子、レイン君と再開した。

No.5 帰ってきた男（後書き）

次回はレインとイエローの再開の話です

多分、甘くなりますね

楽しみに!!

No.6 イエローとレインの気持ち？（前書き）

どうしてこうなってしまったんだ・・・

今回は俺が思うに甘い話です

ブラックコーヒーを片手に持って読んでください

No.6 イエローとレインの気持ち？

sideイエロー

やっと会えた・・・

ずっと会いたかった・・・

会って沢山お話がしたかった・・・

一緒に笑いたかった・・・

無理だった・・・

でも、今日からは違う・・・

だって

レイン君が

帰ってきたから!!

sideレイン

イエローに挨拶したのに無視された。

俺って嫌われてるのか？

俺はイエローの母さんの所へ向かった

レイン「すいません、俺って嫌われてますか？」

「フッフ、違うわよ。只、少し驚いてるだけよ。」

イエローの母さんは笑いながら俺に言ってきた。
しかし、何処に驚く要素がある？

俺はちゃんと手紙を書いた（、、、、）ぞ。

・・・そ、そうか！！

お風呂から出てきたから驚いているのか。
納得納得。

お風呂から出てきたらそりゃ驚くな。
分かったぜ、イエローの母さん！！

それだけのヒントで分かった俺を誉めてくれ！！

イエロー「レイン君！！！」

ガバッ

・・・状況を説明するぜ。

一人で自問自答していたら、突然イエローが抱きついてきた。
イエローの母さんは、物凄い笑顔だ。

Why?

イエローは物凄く嬉しそうだ。

Why?

落ち着け、落ち着けば答えはきっと見えてくるはずだ！！

すうー・・・はぁー・・・すうー・・・はぁー

よし、落ち着いた！！

まずは、イエローが何故こうなったのかを聞かないとな！！

レイン「い、イエロー？」

イエロー「レイン君」

ダメだ、この子は自分の世界^{マイワールド}に入ってしまった。

だが、凄く可愛い！！

誰だ、ロリコンと言った奴は！？

俺とイエローは同年だ！！

だから、俺は決してロリではないから！！

勘違いしないでくれよ！！

いいか、こんな可愛い女の子が抱きついていて尚且つ幸せそうな顔をしている！！

それを可愛いと思わない奴は少し、否、かなりおかしいのだ！！

・・・スマン、少し暴走した。

取り敢えず、離れてもらいたい。

お腹が空いて倒れそうだ。

レイン「イエロー、離れてくれないか？」

イエロー「ええ！？れ、レイン君って僕の事、嫌いなのか？」

イエローは涙目になりながら聞いてきた。

か、可愛い・・・

・・・本当にレッドが羨ましいよ。

でも、誰が誰を好きになる・・・前にも言ったような気がするが、まっ、良いか！！

レイン「大丈夫だ。俺は、イエローの事が（友達として）好きだぞ。

「

俺は笑顔で言う。

人と話す時はやっぱ、笑顔で話すのが良いんだよな。

これ、今回の旅で学んだことの一つ。

イエロー「えっ・・・ええええええ！！！！？れ、レイン君って僕のこと（恋愛対象として）好きなの！！！！？／／／／／／／／」

何故嘘を吐く必要があるんだ？

俺は嘘を言わないぞ・・・極力だが。

レイン「嗚呼。俺は、イエローの事が（友達として）好きだ。この気持ちに偽りはない。」

俺がそう言うといエローは顔を赤くして下を向き、イエローの母さんは先程以上に笑っていた。

顔が赤い？

何処に笑う要素があるんだ？

まあ良いか。

レイン「イエロー、お腹が空いたからご飯が食べたい。離れてくれるか？」

イエロー「う、うん／／／／／」

イエローは顔を赤くして離れてくれた。

素直な子は好きだぞ。

likeの方がな。

レイン「イエローの母さん、お腹が空いたのでご飯をください。」

「フフフ、別にお義母さんでもいいのよ。」

イエロー「お、お母さん!!? / / / / /」

俺がそう言つとイエローの母さんは冗談を言い、イエローはそれを本気にして怒っていた。

これは俺も参加した方が良いのか？

イエローの母さんは俺のことをチラ見してくるから、多分そうなんだろう。

レイン「そうですか？なら今日から義母さんと呼びます。」

「本当？良かったわねえ、イエロー。」

イエロー「おおおお風お風呂にはははは入ってくくるよ!!!
! / / / / /」

イエローはそう言つてお風呂場に走って行った。
そこまで本気にしなくてもいいのに・・・

「フフフ、イエローもまだまだ子供ねえ。」

絶対にこの人はSだ。
間違いないな。

「さ、レイン君、ご飯にしましょ。手伝ってちょうだい。」

やっにご飯かあ。

腹減ったあ。

レイン「分かりました。」

俺はご飯の準備をした。

sideイエロー

レイン「嗚呼。俺はイエローの事が好きだ。この気持ちに偽りはない。」

僕は湯槽に浸かって、レイン君の言葉を思い出す。

す、凄く嬉しい／／／／／

レイン君も僕もお互い両思いだったなんて・・・

夢じゃないよね？

僕は頬をつねる。

・・・痛い。

夢じゃない。

良かった、夢じゃなかった。

今日はレイン君に沢山甘えちゃおかな？

・・・お願い、聞いてくれるかな？

「イエロー、何時までお風呂に浸かってるつもりい？」

お母さんの声が聞こえた。

そんなに長く浸かったのかなあ？

でも、レイン君の事考えてたから浸かってたのかも・・・

イエロー「今直ぐ出るよお!!」

僕はそう言ってお風呂から出た。

sideレイン

どうしてこうなった？

急に何を言いだすのかって？

それじゃあ簡単に説明するぜ。

イエローがお風呂から出てくる（髪を降ろしたイエローも可愛かった）これ重要だぜ

皆でご飯を食べる

ポケモンを見せてほしいと、トキワシティの人全員に頼まれる

原作ブレイクしなくなかったので、ロコンとラプラスとバンギラスだけを見せた

そんなこんなで眠気が俺を襲ってきた

イエローの母さんが、泊まっていけと言ってくれた

俺了承する

何処で寝るのかを聞く

イエローの部屋と答えられる

俺茫然とする

そんな俺をイエローが手を引っ張って部屋に連れてきてくれた

イエローと俺、一緒に布団で眠る（警察に電話しないでほしい）
これ重要

イエローが俺に抱きついてくる 今此処

分かったか？

イエロー「レイン……くん……だいすき……」

……likeだよな？

loveじゃないよな？

loveだったらどうしよう……

ロコン『取り敢えず、今日は寝た方が良いよ。』

그레이シア『そうです、今日は寝た方が良いですよ。』

確かにそうだが……

お前等、何時の間にボールから？

……まあ良いか

レイン「そうするわ……ふぁー……お休み、イエロー、ロコン、
 그레이シア。」

ロコン『お休み、レイン。』

グレイシア『お休みなさい、レイン君。』

俺は目を瞑り、意識を手放した。

No.6 イエローとレインの気持ち？（後書き）

次回から原作開始！！

今回はあの電気ネズミが！？

楽しみに！！

No.7 電気ネズミがいたよ・・・（前書き）

今回のラストにあのキャラとあのポケモンが出ます！！

まあ題名で分かると思いますがね

今回も無理矢理なので、心を広くして読んでください

変な所・誤字・脱字があれば教えてください

No.7 電気ネズミがいたよ・・・

sideレイン

・

・
・
・

・
・
・
・
・

・
・
・
・
・
・

レイン「ん・・・ふぁーあ・・・よくねた。」

俺は目を覚まし上半身を起こし、固まった筋肉を解した。
俺は時計を見た。

午前六時十八分五十三秒

レイン「十八分も多く寝てたのか・・・まあイエローと一緒に寝てたからな。」

何時もは六時に起きるのだが、昨日はイエローと寝たので少し、ほんの少し興奮して眠れなかった。
ほんの少しだけだからな！！
頼むから警察には電話しないで！！
お願いな！！

レイン「・・・あれ、イエローが居ない。何処に行ったんだ？」

隣を見るとイエローが居なかった。

ロコンとグレイシアも居なかった。
何処に行ったんだ？

ラプラス『レイン君、イエローさんはリビングに向かいましたよ。』

バンギラス『ロコンとグレイシアも、イエローに付いていったぜ。』

マジか？

何故こんな朝早くから起きたんだ？

ロコンやグレイシアならまだ分かるが・・・

何故イエローが？

取り敢えず、行ってみれば分かるか。

レイン「それじゃあ起きますか。」

俺は服を着替え、ベルトを腰に巻いてリビングに向かった。

服装は、黒のシャツに白のカッター、黒のズボンだ。

正直な話、この服がお気に入りなんだよな。

レイン「それじゃあ行きますか。」

俺はリビングに向かった。

ロコン『レイン、此処から先は行かせないよ！！』

グレイシア『レイン君、これ以上先に進みたければ私達を倒して行
って下さい！！』

何でこうなってるんだ？

俺は普通に扉を開けた。

そしたら、二体がドアの前に居てそう言っている。
本当にどうしたんだ？

レイン「何で先に進んじゃダメなんだよ？」

俺は二体に聞いた。

ロコン『秘密だよ！！』

グレイシア『秘密です！！』

秘密って言われたら気になるのが人の定め。
だが、二体を傷つけたくないんだよな・・・
此処は大人しく引き下がるか・・・

レイン「分かったよ、準備が出来たら呼んでくれよ？」

俺はそう言って部屋に戻った。

二体は凄くはしゃいでいたが・・・

レイン「・・・暇だ。」

部屋に戻って既に二十分は経過した。
未だに呼びに来ない。
どうすればいいわけ？

ルカリオ『レイン、僕と将棋をしないか？将棋の駒と板はあるみたいだし・・・』

ルカリオが提案してきた。

まあ時間が潰せるからいいか。

後、ルカリオが将棋を出来る事に関しては深く考えないでほしい。理由は聞かないでもらいたい。

レイン「それじゃあやるか。何故イエローの部屋に将棋の駒と板があるのかは疑問になるが。」

俺は、モンスターボールからルカリオ出しながら疑問に思った。

ルカリオ『それじゃあ始めようか。』

レイン「おう、負けないぜ!!」

俺達は将棋をし始めた。

レイン「・・・詰み、だな。」

ルカリオ『・・・くそ、負けた。』

レイン「ふう、危ねえ危ねえ。なんとか勝てた。」

将棋の勝負は、俺の勝ちで終わった。

えっ、何で飛ばしたかって？

将棋をしてる描写を誰が読みたいんだよ？

だから飛ばした。
悪いな！！

ルカリオ『しかし、これで時間が潰せたね。』

ルカリオに言われ、俺は時計を見た。

七時十二分五秒

将棋に集中しすぎて、全く時間に気付かなかった。

レイン「もう大丈夫だろ。」

俺はルカリオをボールに戻し、ドアを開けた。

レイン「・・・はあ、何で呼びに来ないか分かった。」

俺の目の前には、仲良く眠っているロコンとグレイシアがいた。
俺はボールに二体を戻し、リビングに向かった

レイン「すいません、二度寝してしまいました。」

ロコンとグレイシアの事を怒ってほしくないから、俺は嘘を吐いた。

イエロー「レイン君！！」

ガバッ！！

イエローが抱き付いてきた。

likeだよな・・・
俺は信じてるぞ。

「レイン君も来た事だし、朝ご飯にしましょ」

イエローの母さんが笑顔で言ってきた。

そうしよう、腹と背中が今にもくつつきそうですから。

レイン「ピカチュウですか？」

「そうなのよ、最近ニビシティでピカチュウの被害で皆困ってるのよ。」

俺はピカチュウの話聞いていた。

ピカチュウって事は、原作が始まってるとんだな・・・
今日の明け方にレッドがトキワに来たという事だな。

「だからね、レイン君に懲らしめてもらいたいのよ。」

うーん、どうしようか・・・

原作に介入すべきか・・・

一度見てから決めるか。

レイン「一度見てから決めます。取り敢えず、ご飯を食べさせてください。こんな美味しいご飯を冷ましたくないですから。」

イエロー「ほ、本当、レイン君!？」

イエローが俺に顔を近付けて聞いてきた。
ち、近い・・・

レイン「あ、嗚呼。凄く美味いぜ。毎日食べたいくらいだ。」

俺がそう言つとイエローの顔が赤くなつた
Why?

「今日の朝ご飯はイエローが作ったのよ。」

マジですかっ!?

俺も此処まで美味しく作れないぞ!!

レイン「将来は良いお嫁さんになるな、イエロー!・・・俺もこんなお嫁さんが欲しいなあ。」

イエロー「えっ・・・ええええええええええええええええ!!!!? /
// // //」

「あらあら。」

そんな感じで朝ご飯を食べた。

レイン「はぁ・・・」

「何で溜め息吐いてんだ?」

赤い帽子を被っていて・黒のＴシャツを着ていてその上から袖の部

分が白・それ以外は赤のシャツを羽織っており・青のズボンを着ている青年が俺に話し掛けてきた。
もう皆は分かるよな？

この世界の主人公の一人、レッドだ。
そして目の前には

「ピカア！！」

ピカチュウが俺達を睨みながら見えています

原作介入しちゃったよort

No.7 電気ネズミがいたよ・・・(後書き)

今回はピカチュウをゲットする話です

その前に回想するんですけどね・・・

次回もお楽しみに!!

No.8 VSピカチュウ（前書き）

前話を少し修正しました

今回はピカチュウの話です

誤字・脱字などがあれば教えてください

No.8 VSピカチュウ

sideレイン

はぁ、何でこうなったのかなぁ？

思い出せ、レイン！

落ち着け、レイン！

頭にある記憶を呼び覚ませ！

朝ご飯を食べ終わる

ニビシティに行くの序でにピカチュウを探す

赤い帽子・袖が白の赤い重ね着した服・黒のＴシャツ・青のズボンを着た青年と会う

取り敢えず自己紹介をする

まさかのレッド！？

ピカチュウを探す

見つける

ピカチュウに睨まれている 今此处

・・・散歩したからじゃん。ort

レッド「おい、どうしたんだよレイン？」

レッドが俺の肩に手を置きながら聞いてきた。
否、君のせいだからね!!

早くピカチュウを捕まえちゃってよ!!

「ピイカ・・・」

ピカチュウの頬から電気が溢れていた。

あらら、随分と怒ってらっしゃる。

そんなに怒ると皺が増えるぞ!!

・・・ だから、皺が増えても大丈夫か

レイン「レッド、ピカチュウさんはかなりのお怒りだ。君の力でピカチュウさんを救ってやってくれんか？」

何で敬語で話さないのかと言うと、レッドが無理して話さなくても良いと言ってくれたからだ。

流星は主人公!!

心が広いなあ!!

お調子者だけど・・・

レッド「了解!!頼むぜ、フシギダネ!!」

レッドは一つのモンスターボールを投げた。

そこから一体のポケモン・フシギダネが現れた

ピカチュウは、フシギダネを見て一瞬驚いたが直ぐに何時もの顔に戻した。

・・・あの顔はフシギダネを見下してる顔だな。

・・・凄いム力つくなあ。

まあ此処はレッドに任せるか。

「ピカアッ！！！」

ピカチュウがフシギダネに“でんきショック”をした。

ドシンッ！！

ピカチュウの“でんきショック”がフシギダネに直撃した。

「ああー、ダメなのか？」

ニビシテイの人達が、諦めムードを漂わせていた。
否々、まだ終わってないから。

フシギダネが簡単に負けるわけないから。
煙が晴れると、余りダメージを受けていないフシギダネがそこに居た。

「ピカッ！？」

フシギダネの姿を見て、驚いていた。
・・・これで終わりだな。

レッド「それじゃあ次はこっちの番だな！！」

レッドがそう言うと、フシギダネの背中から一つの種がピカチュウに向かった。

そして、その種から出た花粉？でピカチュウは眠った。

レッド「それ！」

レッドは、眠っているピカチュウに近づいてモンスターボールを投げた。

そして、ピカチュウはレッドのポケモンになった。

・・・ふう、なんとか原作通り進んだな。

俺は安心した。

レイン「それじゃあなレッド。」

俺はそう言った。

レッド「何処か寄る所でもあるのか？」

レッドは、ニビシティの人に拍手されながら俺に聞いてきた。

レイン「嗚呼、少し寄る所があるからな。」

俺はそう言って歩きだした。

レッド「じゃあまた何処かで会おうぜ！」

レッドがそう言うてきたので、俺は手を上げ答えた。

俺は直ぐにポケモンセンターに向かった。

明日、ニビジムに挑戦するためだ。

別に明日にでもポケモンセンターに行けば良いのだが、明日はポケモンセンターがロケット団に襲われる。

なので、俺はレッドと別れポケモンセンターに向かった。

レッドに教えても良かったのだが、明日の試合でレッドとピカチュウの友情？が深まるので言わなかった。

俺は、カントー・ジョウト・ホウエン・シンオウは回ったがジムに

は挑戦していない。

なので、明日からジムを回る予定だ。

まあ、明日のジム戦が終われば一度トキワシティに戻って準備しないといけないんだがな。

さて、ロコンとラプラスに頑張ってもらうか！！

俺はそう思いながらポケモンセンターに向かった。

No.8 VSピカチュウ（後書き）

今回はニビジムに挑戦する話です

楽しみに！！

No.9 ニビジムに挑戦しよう(前書き)

地域野球に参加したので、凄く体が怠いです

今回はニビジムに挑戦するまでの話です

誤字・脱字があれば教えてください

No.9 ニビジムに挑戦しよう

sideレイン

レイン「ん・・・んー！！・・・よくねた。」

俺はベッドから上半身を起こし、固まった筋肉を解してそう呟いた。
俺は時計を見た。

午前五時五十八分四十九秒

うん、何時も通りだな。

俺は近くの宿で部屋を借り夜を過ごした。

本当にこの世界は凄いよ。

俺みたいな奴でも、部屋を借りる事が出来たんだからな。

まあ、旅をしている時は流石に何度か追い出されたがな。

今日はニビジムに挑戦する日。

昨日のうちにポケモンセンターに行った。

対策も考えた。

後は予選を勝ち上がって戦うだけだ！！

俺はベッドから出て、黒の半袖のTシャツを着て、グレーのジーパンを着た。

まあ地味なんだけど、シンプルイズベストって言葉があるからその所は気にしない。

俺はモンスターボールが付いたベルトを腰に巻いた。

さて、そろそろ行きますか！！

俺はニビジムに向かった。

勿論、お金を払ったぜ。

お金は・・・うん、旅で稼いだお金があるから余裕だぞ。

まあ今持っている金額は・・・中古の単車の車が買える位の金額を持っている。

・・・何かすまないな。

俺はニビシティを探索している。

何故なら、余りにも早くニビジムに着いてしまったからだ。

ニビジムの予選が始まるのは午前八時から。

今の時刻は午前七時五十分ぴったり。

後十分あるわけ。

なので、俺はニビシティを探索している。

そうだ、さっきポケモンセンターを見てきた。

やはり原作同様、破壊されていた。

まあ俺は昨日の内にポケモンセンターに行ったから問題はない。

俺がニビシティを探索していると、前から誰かが歩いてきた。

ニビジムの挑戦者か？

俺は目を凝らして歩いてくる奴を見た。

「・・・」

・・・ビッキー

まさに目から鱗だ。

目の前から茶髪のツンツン髪・紫の長袖の服・黒のジーパン・茶色の靴・少し変わったペンダントを掛けている少年、グリーンが来たからだ。

此处に来てまた原作キャラとエンカウントなんて・・・o r t

グリーン「おい、何で俺を見て落ち込んでんだよ。失礼にも程があるだろ。」

グリーンが俺の前に来て、そうやってきた。
確かにそうだな。

初対面の奴に顔を見られて落ち込まれるのは、気分が良いとは言わないな。

謝らないとな！！

レイン「すいません。オーキド博士の孫であるグリーンさんと、二ビジムの予選と戦ってしまうと思ひまして・・・本当にすいません。

」

俺は直ぐに立ち上がり、頭を下げた。

今回は俺が悪い。

悪い事したら素直に謝る

これも俺が旅をして学んだ事だ。

まあこれは当たり前前事なだけだな。

グリーン「・・・お前、名前は？」

グリーン「・・・否、グリーンさんが俺の名前を聞いてきた。

レッドはため口で良いと言われたが、グリーンさんからはまだその許可を得てないからな。

だから言い直した。

悪いな、さっきから口調がコロコロと変わって。

レイン「俺の名はレインボー、レインと呼んでください。」

俺は笑顔でグリーンさんに言った。

自己紹介の仕方がクリスタルみたいだったが、後悔はしていない。

グリーン「・・・お前も二ビジムに挑戦するのか？」

グリーンさんも挑戦するんだったよな。

・・・予選で当たったらどうしようか？
原作通り進めたいから、もしグリーンさんとレッドと戦う事になったら棄権でもするか。

レイン「そうですよ。予選で当たらなければ良いですね。」

俺はそう言うが、グリーンさんは鼻で笑った。

・・・カッチーンときたが、俺は大人だから水に流してやろう！！
皆は忘れてるかもしれないが、俺は転生者だ。
だから、精神年齢はグリーンさんより上だぞ！

グリーン「精々無様な負け方はするなよ。」

グリーンさんはそう言って二ビジムに向かって歩いていった。

・・・coolになれ、coolになるんだ。

ロコン「あいつは絶対に許さない！！！」

ラプラス「久々に僕も切れたよ！！！」

バンギラス「レインとの実力の差も分からない青二才のくせに舐めた口を利きやがる。」

ボーマンダー「俺があいつの自信を粉々にしてやる！！！」

ルカリオ「レイン、彼と戦う時は僕に戦わせてよ。」

グレイシア「ダメです！！私が彼と戦います！！レイン君、私に戦わせてください！！彼に絶望を見せてあげますから！！！」

否、皆勘違いしてるから。

戦うのはグリーンさん本人じゃなくて、グリーンさんのポケモン（、、、）だから。

それに、今はあんな性格だけど将来は良い性格になるから。

だから、今は我慢しないと。

・・・待てよ、グリーンさんがニビジムに向かったって事は受け付けは始まってんじゃない？

レッドみたいにギリギリ参加はしたくないから、早めに行っとくか。

レイン「取り敢えず、今日はロコンとラプラスで行くから。他の皆は我慢してくれ。」

全員『分かった（分かったぜ）（分かったよ）（分かりました）』

皆は素直に返事をしてくれた。

お兄さん、素直な子達は好きだぞ！

like だな・・・

レイン「さあて、頑張りますか！！」

俺はニビジムに向かって歩きだした。

No.9 ニビジムに挑戦しよう(後書き)

次回はニビジムの戦いの話です

次回もお楽しみに！

No.10 VSゴローン(前書き)

初のポケモンバトル!!

ちゃんと皆さんに伝わるかどうか、凄く不安です・・・

誤字・脱字があれば教えてください

No.10 VSゴローン

sideレイン

レイン「ラプラス、“ハイドロポンプ”!!」

ラプラス「分かったよ!!」

俺がラプラスに指示を出すと、ラプラスは俺の指示に従って“ハイドロポンプ”を放った。

バsshャーーン!!!

ラプラスが放った“ハイドロポンプ”は、相手に直撃した。すると相手は、目を回しながら倒れた。

「ワンリキー、戦闘不能!!ラプラスの勝ち!!」よってレイン選手、決勝戦進出決定!!」

審判は俺の方に旗を上げて、そう宣言した。

分からない人の為に、一応説明しとくぜ。

俺は今、ニビジムの予選の準決勝に勝った所だ。

グリーンさんを追い掛けると、既にニビジムの予選が開始されていた。

俺は直ぐに予選にエントリーし、ロコンとラプラスを交互に使って予選を勝ち上がっていった。

俺は運が強かったのか、此処までレッドとグリーンさんと当たる事は無かった。

・・・運が良くてマジで良かった。

そうそう、俺が準々決勝時、隣のリングでレッドが戦っていた。レッドのポケモンは、HPが見ただけで分かる位残っていなかった。やはり原作通り、レッドは昨日の内にポケモンセンターに行つてなかったと推測出来る。

だが、レッドはHPの少ないフシギダネで一撃で敵ポケモンを倒していた。

原作通りなら、フシギダネとレッドのもう一体のポケモンであるニョロゾのHPは限界だろう。

「マサラタウンのレッド君！決勝戦進出決定！！」

アナウンスが聞こえた。

無事に決勝戦まで勝てたのか・・・

だけど、もうフシギダネとニョロゾは無理だろう。

ピカチュウが原作通りの行動を起こしてくれば良いが・・・

「レイン君！第二リングへ向かってください。決勝戦を始めます！」

おっと、俺の決勝戦のようだな！！

俺はロコンが入ったモンスターボールを腰から外して、俺の顔の前まで持ってきた

レイン「ロコン、準備は良いか？」

ロコン『勿論だよ・・・だけど、アイツと戦えなかったのは残念だったな。』

ロコンが言ったアイツとは、多分グリーンさんの事だろう。俺としては、戦わなかったので安心してるんだけど・・・

レイン「ま、頑張りますか!！」

ロコン『うん!』

俺は急いで第二リングに向かった。

タケシ「お前がレインボーか？」

俺と向かい合わせに立っている人物・ニビジムのジムリーダーのタケシさんが聞いてきた。

俺はゆっくり頷いた。

タケシ「お前達の勝負、凄いの一言に尽きる。だが!俺もニビジムのジムリーダー!全力でお前と戦おう!!使用ポケモンは一体・相手のポケモンを倒せば勝ち。分かったか？」

レイン「嗚呼。」

俺がそう言くと、タケシは笑った。

全力で戦う相手に、手加減して戦うのは失礼にも程があるな。こっちも全力で戦って、そして勝つ!!

タケシ「行け、ゴローン!!」

レイン「頑張れ、ロコン!!」

タケシさんはゴローンを・俺はロコンをリングに出した。

タケシ「相性はコチラが勝ってるぞ。」

レイン「それくらい分かってるよ。」

タケシさんの言う通りロコンのタイプは火、それに対しゴローンのタイプは岩・地面

相性はロコンの方が最悪だ。

だが、ポケモンバトルは相性だけが勝負を決めるものじゃない！！

タケシ「そうか・・・ゴローン、“転がる”！！」

タケシさんは、ゴローンに“転がる”を指示した。

するとゴローンは、ロコンに向かって転がってきた。

・・・甘いな。

レイン「ロコン、“影分身”！！」

ロコン『分かった！！』

俺はロコンに指示を出すと、ロコンは直ぐに“影分身”を発動させた。

ロコンは二十体の“影分身”を作って、ゴローンを焦らせた。

狙い通り、ゴローンはどのロコンを攻撃したら良いのか分からなくなっ
て混乱していた。

レイン「ロコン、“日本晴れ”！！」

俺がそう指示を出すと、リングの上に擬似太陽が現れた。

本来はこんな風にはならないのだが、俺達が修業して建物の中でも

“日本晴れ”が出来る様にした。

タケシ「ば、バカな！？建物の中で“日本晴れ”が出来るなんて！？」

タケシさんは、リングの上にある擬似太陽を見ながらそう言った。
普通は出来ないよ。

俺達が異常だから、こんな事が出来るんだから。

・・・さて、下準備を整った事だし、そろそろ決めるか！！

レイン「ロコン、“ソーラービーム”！！」

ロコン『了解』

俺がロコンに指示を出すと、ロコンは“影分身”をしながら“ソーラービーム”のエネルギーを溜め始めた。

タケシ「や、ヤバい！！ゴローン、全てのロコンに“メガトンパンチ”だ！！」

タケシさんはゴローンに指示を出す、もう間に合わない！！

レイン「“ソーラービーム”、発射！！」

俺がそう言うと、ロコンはゴローンに“ソーラービーム”を放った。

ドッカーーン！！！！

“ソーラービーム”がゴローンに直撃すると、大きな爆発音が響いた。

そしてゴローンは、目を回しながら倒れた。

一応説明しとくぜ。

“ソーラービーム”は本来、エネルギーを溜めるのに時間が掛かる。だが天候が“日照り状態”だと、エネルギー溜める時間は殆ど掛からない。

なのでロコンは、時間を掛けずに“ソーラービーム”を放てたわけだ。

「ご、ゴローン、戦闘不能！ロコンの勝ち！よって勝者、トキワシテイのレインボー！」

審判は、驚きながらも旗を俺の方へ上げた。

ウワアアアアアアア！！！！！

物凄い歓声が、ジムに響いた。

俺はロコンを撫でて、モンスターボールに戻した。

するとタケシさんが、ゴローンをモンスターボールを戻して俺の前に来た。

タケシ「凄い試合だったよ。君みたいなトレーナーも、世界には沢山居るんだな。勉強になったよ。」

タケシさんは、頬笑みながら俺に言ってきた。

俺も、タケシさんに頬笑みながら「世界は広いですから。」と言った。

するとタケシさんは、審判から何かを受け取って俺に渡してきた。

タケシ「ジムバッチだ。受け取ってくれ。」

俺はタケシさんからジムバッチを受け取って、（自作の）バッチケースに入れた。

服に付けても良かったんだが、どっかの泥棒さんに奪われるのは面倒なので（自作の）バッチケースに入れた。

タケシ「また、俺と戦ってくれないか？」

タケシさんは、俺に手を出して聞いてきた。
そんなの、答えは決まってる！！

レイン「良いとも！！」

俺はタケシさんの手をがっちり握って、そう言った。

俺の最初のジム戦は、俺の勝利で幕を閉じた。

そうそう、言い忘れていたが、レッドとグリーンさんも無事にバッチを手に入れた。

グリーンさんの戦いは観ていないが、レッドの戦いはちゃんと観たぜ。

やはり原作通り、レッドはピカチュウを体を張って護った。

そしてその想いが届いたのか、ピカチュウの一撃でタケシさんのイワークが負けた。

さて、今日は疲れたから宿に泊まって明日トキワシティに帰る。
俺はそう思いながら、宿に向かった。

No.10 VSゴローン(後書き)

次回はトキワシティに帰る話です。

次回もお楽しみに!!

No.11 また旅に出ようと思う(前書き)

今更ですが、レインの持ち物について

ポケギア

タウンマップ(カントー)シンオウまで)

スケッチブックと鉛筆と消しゴム(自作のポケモン図鑑)

財布とお金(中古の軽自動車が買える位の金額)

服と下着(一着ずつ)

バッチケース(自作)

これ位かな?

話の展開は何時も通り、急です

誤字・脱字があれば教えてください

No.11 また旅に出ようと思う

sideレイン

ニビジムのジム戦の翌日・・・

レイン「フウ・・・無事に勝ったんだよな。」

俺は荷物を纏め、鞆に詰めながらバツチを見て俺はそう呟いた。
これから、もう一度カントーを回ってジムに挑戦する。

まあ決めたのは良いんだけど、イエローに何て言おうか・・・
また旅に出るって言ったら、どんな反応してくれるだろう？
少し、少しだけ考えてみよう・・・

パターン1

笑顔で送り出してくれる

イエロー「えっ、また旅に出るの？・・・レイン君が決めた事だからしょうがないよね。頑張ってね!!」

パターン2

泣いて俺が旅に行くのを拒む

イエロー「えっ、また旅に出ちゃうの!?・・・いやだよお、せっかくかえってきたのに・・・またあえなくなるなんていやだよお!!」

・・・この二通りしか思い付かないが、出来ればパターン１の反応をしてほしい。

イエローの泣き顔を見るのは辛いな・・・

神様お願い！！

イエローがパターン１の反応をしてくれます様に！！

神様『それは無理じゃ。』

頭の中に、俺を転生させてくれた神様の声が聞こえた。

例え神様が俺を見捨てたとしても、俺は最後の最後迄諦めない！！

・・・イナズマイレブンの今日の格言だな、最後の言葉は。

使った事に反省はしないが後悔もしない。

・・・言う必要があったのか、この上の言葉は？

神様『速く逝ってくるんじゃ！』

行くとて言う字が違うよ、神様！！

俺は逝かないから！！

レイン「取り敢えず、勇気を出して帰ろう。」

俺は鞆に荷物を全部詰め込み、鞆を背負って宿から出た。
言い忘れていたが、俺は昨日と同じ宿に泊まったから。

レイン「それじゃあ、イエローの所に・・・逝こう。」

字が違うって？

・・・気にしないでくれ。

イエロー「いやだよお！！れいんくん、いかないですよお！！」

イエローは俺に抱き付きながら泣いて俺に言っている。

・・・やっぱパターン2だったか！

クソッ、何でパターン2なのかな！？

神様に祈ったよ、俺！！

何故神様は、俺を見捨てるのかな！？

イエロー「おねがいだよお、もうどこにもいかないですよ。」

・・・余りやりたくなかったが

レイン「イエロー。」

ガバッ！！

イエロー「れ、れいんくん？／／／／／」

俺はイエローを抱き締めた。

はつきり言っ、俺が存在しなかったらイエローは泣く事は無かった。

だけど、俺と言うイレギュラーが存在する所為でイエローが泣いてしまった。

俺がイエローに出来る事は、イエローが幸せになる様にサポートす

る事。

それが、俺がイエローに出来る精一杯の行動だ。

レイン「イエロー？もう二度と会えない訳じゃないんだ。俺は、カントーのジムに挑戦する為に旅に出るんだ。俺はカントーのジム全部に挑戦し終わったら、必ず此処に、イエローの所に帰ってくる。だから、もう一回だけ、もう一回だけ、俺を待っていてくれないか？」

俺が聞くと、イエローは黙って頷いてくれた。

俺はイエローの頭を撫でながら「ありがとう」と言った。そして、俺はイエローから離れた。

イエロー「あつ・・・」

俺が離れると、イエローは残念そうな顔をした。

Why?

まあ気にしちゃダメだと思うから、気にしないけどな。

レイン「それじゃイエロー、行ってくるよ。」

イエロー「・・・無事に帰ってきてね？」

レイン「分かってるよ。」

俺はそう言っ、鞆をちゃんと背負い直し歩きだした。

イエロー「必ずだよお!!」

俺は手を上げて返事をした。

全部のジムへ挑戦

ロケット団の野望の阻止及び壊滅

マグマ団・アクア団の野望を阻止及び壊滅

デオキシス・ジラーチの保護

ギンガ団の野望を阻止及び壊滅

・・・関わりたくなかったが、原作キャラと接触しないといけないな。

次に向かわないといけないのは、ハナダシティか・・・

オツキミ山を超えないとダメだけどな。

レッドに追い付けると良いが！！

俺は走りだした。

No.11 また旅に出ようと思う（後書き）

次回はオツキミ山での話ですね

レッドとカスミと、上手く合流させたいなあ

次回もお楽しみに！！

No.12 目指せハナダシティ！（前書き）

無事に書けた・・・

しかし、もう直ぐで夏休みが終わってしまう・・・

なのに、夏休みの宿題が終わってない

・・・マジでヤバイ

誤字・脱字があれば教えてください

No.12 目指せハナダシティ！

sideレイン

俺は今、オツキミ山を目指して現在進行形で全速力で走っている。
あの子の事を簡単に説明すると、イエローと大切な約束をした後、
俺はトキワの森をポケモンと出会わない様にしながら無傷でトキ
ワの森を抜け、ニビシティで一息付いてからオツキミ山に向かって
走っている。

原作通りなら、カスミさんのギャラドスを助ける話があったよな？
でも、さっき通った道に水溜まりが沢山あったから、その話は既に
終わったのか？

だったら、急いでオツキミ山の近くにあるポケモンセンターに行か
ないと！！

俺は走るスピードを速めて、レッドが居るであろうポケモンセンタ
ーに向かった。

レイン「ハア・・・ハア・・・や、やっと着いた。」

俺は息切れをしながらも、前にあるポケモンセンターを見ながらそ
う言った。

さて、中にレッドは居るのだろうか？

俺は呼吸を整えながらポケモンセンターに入ろうとした。
そしたら、ポケモンセンターの扉が開いた。

レッド「あつ・・・レイン！お前の力を貸してくれないか？」

中から、レッドと一人の女性がポケモンセンターから出てきた。

多分、この女性がカスミさんだろう。

しかしレッド、急に力を貸せってどうよ？

まあ別に良いけどさ・・・

レイン「別に良いけどさ・・・でも、俺はオツキミ山に行くぜ？」

レッド「嗚呼、俺達もオツキミ山に向かおうと思ってたんだ。なあ、カスミ？」

カスミ「ええそうよ。私はカスミ。貴方はレイン君ね？よろしく。」

カスミさんは俺の前に手を出してきた。

俺はカスミさんの手を握った。

レイン「よろしくお願いします、カスミさん。」

レッド「挨拶は済んだな？それじゃあオツキミ山へ急ごうぜ！」

レッド、落ち着けて。

そんなに急がなくてもオツキミ山は逃げないから。

あつ、でもロケット団は急がないと居なくなるか・・・

俺は一人で自問自答しながら、レッドの後を追いつけた。

レッド「・・・あれがロケット団。マサラタウンにも、アイツ等が居たぞ。」

レッドは、前に沢山居るロケット団を見ながらそう呟いた。
俺達はあの後、オツキミ山の入り口に来た。

だが、ロケット団が沢山居たので俺達は現在進行形で草陰に隠れながらロケット団の様子を伺っている。

「何としても“月の石”を見つけたすんだ!!」

ロケット団の下っぱの一人が、仲間の下っぱに聞こえる様に言っただけで、何処かにオツキミ山に入る入り口があったよな・・・探さないと・・・

レッド「おい、コッチに入り口を見つけたぞ。」

レッドが俺達にしか聞こえない位の声で、俺達にそう言ってきた・・・レッド、少しは冷静に動こうと思わないのか？まあ別に良いけどさ。

俺達はレッドが見つけた入り口に入ってしまった。

No.12 目指せハナダシティ！（後書き）

次回はロケット団と初のバトル！！

次回もお楽しみに！！

No.13 VSサイホーン(前書き)

今更ですが、ポケモンって一体何個迄技を覚えて良いのでしょうか？

ゲームみたいに4個？

でも、ポケスペやアニメのポケモンは4個以上の技を使ってるし・

何個迄覚えさせても良いですか？

教えてもらえると凄く嬉しいです

後、今回は余り戦闘の話はありません

誤字・脱字があれば教えてください

No.13 VSサイホーン

sideレイン

俺達は今、レッドが見つけたオツキミ山の洞窟の中を歩いている。しかし・・・前が見えない。

カスミ「これじゃ・・・何処を歩いているのか分からないわね。」

俺の前を歩いているカスミさんが、俺とレッドに聞こえる様に言った。

確かに目の前が見えない暗さで、洞窟を歩くのは危険過ぎる。

でも、俺の手持ちの中に洞窟を明るくする技・“フラッシュ”を覚えているポケモンは居ないんだよな・・・

まあロコンの“日本晴れ”を使えば良いのだが、あれは酸素を激しく消費するので洞窟の中で使うと酸欠で倒れてしまう危険性があるから使えない。

さて、どうしたものか・・・

レッド「出てこい！」

俺が考えてると、レッドがピカチュウをボールから出した。

そう言えば、原作ではレッドのピカチュウが洞窟を明るくしてたな・・・

しかし、ピカチュウの機嫌が悪過ぎるぞ。

カスミ「機嫌・・・悪そうね。」

俺の思った事を、カスミさんがピカチュウを見ながら言った。
うん、ホントに機嫌が悪いよ、このピカチュウ・・・

レッド「最近捕まえたポケモンだからね・・・でも、実力はお墨付きさ。」

レッドがそう言つと、ピカチュウが“フラッシュ”をして洞窟が明るくなった。

実力はお墨付きだけどさ、少しは懐いてもらおうよ。

俺は心の中でレッドに突っ込んだ。

カスミ「レイン君、貴方ってポケモントレーナーなのよね？」

暫く洞窟を歩いていると、カスミさんが突然俺に話し掛けてきた。

レイン「ええ、俺もポケモントレーナーですよ。今はカントーのジムを制覇する為に旅をしています。」

俺がそう言つと、カスミさんは驚いた顔で俺を見てきた。

・・・俺みたいな小さい子供が、ジムを制覇する為に旅に出るのがそんなに珍しいのだろうか？

まあ、ホウエンやシンオウを旅している時は、よく警察にお世話になつてたなあ・・・

迷子や家出・拳げ句の果てに誘拐された子供などと言われ、何度警察署にお世話になった事やら・・・

あ、あれ？

目から汗が出てきたなあ・・・

な、何で？

カスミ「え・・・と、ごめんね、何か思い出したくない事を思い出

させちゃって・・・」

カスミさんが俺にハンカチを渡して、俺に謝ってきた。
チクシヨウ、今の俺の精神年齢は大人なのに・・・

俺は、カスミさんから渡されたハンカチで目から出てくる汗を拭いた。

な、涙じゃないからな!!

そこの所を間違え無いでくれよ!!

レッド「ウワツ!?!」

突然、前を歩いていたレッドが尻餅を付いて倒れた。

俺とカスミさんは、レッドの隣に立って目の前に居る岩の様なポケモン・サイホーンを睨み付けた。

「貴様等、外の入り口は完全に塞いでいた筈だ・・・どうやって入った?」

ポケモンの陰からロケット団が沢山出てきて俺達を囲んで、その内の一人が俺達の前に立って聞いてきた。

・・・コイツ、確か何処かのジムリーダーだったよな。

レッド「答える必要は・・・ねえぜ!!勝負!!」

レッドはそう言うと、レッドのピカチュウはロケット団のサイホーンに身構えた。

・・・俺も戦う準備をしておこう。

ラプラス、今回はお前の力を借りるぞ。

ラプラス『（分かったよ、レイン）』

俺はラプラスのボールを腰から取り出して、トキワの力を使ってラプラスと言葉を発せずに会話をした。

「サイホーン、“岩落とし”！」

するとロケット団のサイホーンが、レッドのピカチュウに“岩落とし”を放った。

するとレッドのピカチュウは、岩に埋められたが直ぐに出てきて、電気で集めた砂鉄を固めた物をサイホーンに放った。

レッド「俺のピカチュウは、聞き分けは悪いが強いぜ！」

レッドは、ロケット団を見ながらそう言った。

レッド、それは威張る事なのか？

しかし、ピカチュウの攻撃のお陰でサイホーンを倒す事が出来た。

「全く、しょうがないガキ共だ・・・」

するとサイホーンを操っていたロケット団の奴が、注射針を取り出してサイホーンの横に行った。

すると注射針をサイホーンに注射した。

「ロケット団に歯向かうとどうなるか・・・」

するとサイホーンの怪我は一瞬にして治り、サイホーンがサイドンに進化した。

・・・コイツ等、進化させる薬を作るのに、一体どれだけのポケモンを・・・

・
・
・絶対によイツ等、壊滅させてやる!!

No.13 VSサイホーン（後書き）

次回はレイン無双の話（を予定してます）

次回もお楽しみに！！

No.14 VSサイドン（前書き）

ポケモンの技は最大八個迄覚えれるが、バトルフロンティアなどの施設に参加する場合は事前に八個の中から四個選ばなければならない

そして、マシン技はマシンを使わないと覚えれない

人に教えてもらえる技も、教えてもらわないと覚えれない

タマゴ技はレベルアップで稀に覚える可能性がある

覚えたての技は、威力や命中率が落ちたり反動があつたりする

これがこの小説の大まかな技についてですね

詳しくはまた別の時に書きます

後、今回から地の文の書き方を変えたので、以後はこの書き方で進めていくのでよろしくお願いします

誤字・脱字があれば教えてください

No.14 VS サイドン

sideレイン

俺達の目の前には、人工的に進化させられたサイドンが居る。

コイツ等、どれだけのポケモンを犠牲にしてこの薬を作り上げたんだ……

カスミ「ま、まさか貴方達、私のギャラドスにもそれを……!?」

カスミさんがサイドンを見て、怒りと不安の感情が籠もった顔でロケット団に聞いた。

するとサイホーンをサイドンに進化させた男が、間抜けな顔をしながら俺達を見てきた。

「ん~~~~!? 何だつて? 実験はそこら中でやったからな。一々覚えちゃおれん!」

ブチッ!!

俺はロケット団の言葉を聞いて、俺の中にある何かが切れた。

カスミさんはその言葉を聞いて完全に怒り、ボールからヒトデマンを出してサイドンに攻撃し始めた。

サイドンはカスミさんに任せて、俺は俺達少し後ろで殺気を放っている奴等を倒すしよう。

俺は後ろに歩いていって、目の前に大量のロケット団の下っぱ達が現れたので横にラプラスを出して、ロケット団の下っぱ達に指を指した。

レイン「ラプラス、ロケット団の下っぱ達に“ハイドロポンプ”」

ラプラス『分かった!』

俺がラプラスに指示を出すと、ラプラスは俺の指示に従ってロケット団の下っぱ達に“ハイドロポンプ”を放った。

ドッシューーン!!!!!!

「「「ウアアアアアアアアアア!!!!!!?」」」

ロケット団の下っぱ達は、ラプラスの“ハイドロポンプ”を喰らって悲鳴を挙げて倒れていった。

すると突然、大量の水が俺達の所に向かってきた。

それと同時に、俺に向かってカスミさんが飛んで来た。

俺はカスミさんをキャッチしたが勢いを殺す事が出来ず、地面に叩きつけられた。

レイン「イテテテ……な、何でカスミさんが飛んで来たんだ?」

俺はよく分からなかったので、目を瞑って原作を思い出そうとした。

確か、ヒトデマンの攻撃でサイドンが劣勢になっていたが、サイドンの“角ドリル”でヒトデマンの攻撃を跳ね返されて……!?

レイン「レッドがヤバイ!!!ラプラス、今直ぐレッドの所へ行くぞ!!!」

俺はそう言つてカスミさんをラプラスの背中に乗せて、走つてレッド達の所へ向かった。

俺達がレッドの所へ戻ると、レッドのピカチュウがサイドンに踏み付けられていた。

ピカチュウが原作通りに倒すのは分かっているけど、二対一になって卑怯になつても、黙つて見ていられる訳無いだろ――！

レイン「ラプラス、サイドンの頭に“冷凍ビーム”――！」

ラプラス『分かった！』

俺がラプラスに指示を出すと、ラプラスは俺の指示通りサイドンの頭に向かって“冷凍ビーム”を放った。

不意打ちの“冷凍ビーム”の所為で、サイドンは一瞬怯んだ。

レイン「今だ、レッド――！」

レッド「分かった――！頼む、ピカチュウ――！」

レッドがピカチュウに叫ぶと、サイドンの足元からピカチュウが現れて、電気の帯びた尻尾で上にある岩に向かって弧を描く様に攻撃した。

「ワハハハ……！何処を狙っている――！」

サイドンを使っていたロケット団の男がピカチュウを見ながらそ

う言つと、ピカチュウは岩に電気を流した。

すると岩が突然、地面に落ちてきた。

ロケット団は、岩を避ける為に奥に逃げていった。

ドッカーーーーーン!!!!!!!!!!

そして岩が落ちてきて、俺達とロケット団は完全に二手に別れた。

その後、レッドが月の石を拾っていて、カスミさんをレッドにおんぶさせて、俺達はオツキミ山の出口に向かって歩きだした。

その途中、俺が倒したロケット団の下っぱ達を見てレッドが驚いていたのは言う迄も無い。

No.14 VSサイドン（後書き）

次回はカスミの家でパーティーをする話（を予定しています）

次回もお楽しみに！！

No.15 一時のパーティー（前書き）

……パーティーの話は全然少ないです

……これと言って書く事も無いし……

誤字・脱字があれば教えてください

No.15 一時のパーティー

sideレイン

レッド「おっ……やっと出口が見えてきた……」

レッドの言う通り、目の前に外の光が洞窟の中に差し込んでいた。俺達は体中泥だらけになりながらもオツキミ山の出口に歩いて、漸くオツキミ山を抜け出す事が出来た。

レイン「よ、漸くオツキミ山を抜け出す事が出来た。」

カスミ「うーん……ここは……どこ？」

俺がオツキミ山を抜けて背伸びをしながらそう言うと、レッドに背負われていたカスミさんが目を覚ました。

目が覚めたカスミさんは、自分の体を見て驚いた顔をした。

カスミ「ちよつと！何で泥だらけな訳！？」

レッド「え？」

カスミ「イヤー！！何処触ってんのよ、スケベー！！」

レッド「グハッー！！」

カスミさんが、自分の体が泥だらけな事を驚いた時、レッドの手がカスミさんの体の何処かを触っていたので、カスミさんはレッドを力一杯殴り飛ばした。

……レッド、今のは流石にお前が悪いぞ。

もう少し女性を丁寧に扱わないと……

まあ言わなかった俺も悪いけどさ……

そして何事も無かった様に、二人はハナダシティに向かって歩き出した。

……気にしちゃダメなんだろう。

だから、俺は気にしない、否、気にしちゃいけない。

レッド「ちえっ！俺の活躍を見せたかったぜ。こうやって敵を食い止めてだな……。」

レッドが歩きながら、あの時の戦いをカスミさんに自慢し始めた。……俺が介入しなかったら、レッドのピカチュウは負けそうだったよな？

この世界は原作と違う……否、俺が居たからあんな風になっただけだ……。

俺がそう思っていると、カスミさんがオツキミ山を何か悔しそうに見ていた。

カスミ「それにしても……、惜しかったね月の石……。」

カスミさんがそう言うと、レッドは笑いながらポケットからある物を取り出して、カスミさんに見せた。

カスミさんは、レッドが見せてきた物を見て驚いた顔をした。

カスミ「ああ!？」

レッド「洞窟が崩れた時、偶然見つけちゃったもんね〜！」

レッドはそう言って、ハナダシティに向かって走り出した。俺とカスミさんは、レッドを追い掛ける為に走りだした。

.....

.....

.....

.....

俺達はハナダシティにやってきた。

そして俺とレッドは、この町の出身のカスミにハナダシティを案内してもらっている。

暫く歩いていると、カスミさんが豪華な屋敷の前で立ち止まった。カスミ「さあ着いたわ。」

レッド「うわあっ！？こ、これ全部君ん家、？」

カスミ「そうよ。」

レッドは大声を出して驚きながらカスミさんに聞くと、カスミさんは笑顔でレッドの言葉を肯定した。

俺は顔には出していないが、内心ではかなり驚いていた。

俺とレッドが驚いていたら、屋敷から沢山のメイドさんが走って来た。

「「「お帰りなさいませ、カスミ様！」「」「」

俺とレッドは、メイドさんの余りの多さに呆気を取られた。

するとメイドさん達が、カスミさんの泥だらけの姿を見て驚いていた。

「まあ……！カスミ様、何てお姿に！？」

カスミ「まあね……。あつ！紹介するわ、新しい友達のレッドとレイン君よ。」

カスミさんが、メイドさん達に俺達の事を紹介してくれた。

レッド「おす。」

レイン「よろしくお願いします。」

俺とレッドはメイドさん達に挨拶をして、カスミさんの屋敷に入っていた。

.....

.....

.....

.....

俺達はカスミさんの屋敷でお風呂に入らせてもらって、カスミさんの屋敷で用意してくれたバスローブを着てリビングにやって来た。そこには、豪華な料理が沢山並べられていた。

レッド「何だか落ち着かねえな、……。そうだろ、レイン？」

レッドは豪華な料理を見て、そわそわしながら俺にそう聞いてき

た。

レイン「あ、嗚呼。」

俺も動揺しながらレッドに応えた。

すると扉から、ドレスを着たカスミさんがやって来た。

カスミ「お待たせ、レッド、レイン君！」

……スゲエ、女の人って服が変わるだけで印象が変わるんだな……

レッド「ヒュ〜！」馬にも衣裳”とはこの事だぜ！」

レッドがカスミさんを見てそう言った。

……レッド……

レイン・カスミ「馬子にも”……だろ（でしょ）！」

俺とカスミさんは、声を揃えてレッドに突っ込んだ。

その会話を聞いて、沢山のメイドさん達が小さい声で笑いだした。

カスミ「さあ、食事にしましょう。」

カスミさんがそう言ったので、俺達は席に座った。

N o . 1 5 一時のパーティー（後書き）

今回はレッドが襲撃される話・レインがカスミと特訓する話（を予定しています）

次回もお楽しみに！！

No.16 俺は修業、レッドは襲撃（前書き）

木曜日からテストなので、もしかしたら次回は更新出来ないかもしれません

御了承ください

誤字・脱字があれば教えてください

No.16 俺は修業、レッドは襲撃

sideレイン

レッド「……でさ、カスミは早々に気を失っちまって、頼れるのは俺だけでさ……。」

レッドが料理を食べながら、今日のロケット団の戦いの事をメイドさんに自慢していた。

カスミさんは不機嫌そうに、俺は無言で料理を食べ続けた。

……しかしレッド、今日の戦いは俺が居なかったら負けてたかもしれないぞ。

俺はそう思いながらレッドを見て料理を食べ続けた。

あつ、この料理、凄く美味しい……

後でメニューを貰えるか聞かないと……

レッド「ロケット団を相手に、俺の大活躍と来たら……。」

カスミ「……ちょっとレッド、食事が済んだら話が在るんだけど……。勿論、レイン君にも……。」

するとカスミさんが突然、真剣な顔をして俺とレッドにそう言うてきた。

……特訓のお誘いだろうか？

レッド「何だよ？ 煩いなあ、もう！ 良い所なのに……。」

だがレッドはニヤニヤ顔をしながら、カスミさんの顔を見ずにメイドさんと話続けた。

……レッド、話し掛けられたら相手の顔を見ようぜ……

そのレッドの態度を見てカスミさんは少し苛立ったが、直ぐに真剣な顔をして話し始めた。

カスミ「もう直ぐしたらポケモン達の回復も済むわ。そうしたら、早速今晚からでもロケット団に対抗する特訓を始めようと思うの。」

…… やつぱり、特訓のお誘いだっただか。

まあ、特訓は何度やっても損は無いからな……

レッド「特訓？」

レッドが？マークを頭に浮かべながら、カスミさんの顔を見た。

レッドが顔を動かしたので、カスミさんはさっきより真剣な顔をして話し出した。

カスミ「ええ、オツキミ山で出会った奴等が首領格とは思えないでしょ。彼等より強い敵が、まだまだ居る筈だもの。」

カスミさんは握りこぶしを作って、俺達に力説してきた。

俺はカスミさんに頷いたが、レッドは余裕そうな顔をした。

レッド「必要ないよ、そんなの。」

レッドがそう言うと、カスミさんは驚いた顔して、俺はレッドの顔を見ながら溜め息を吐いた。

カスミ「……！ど、とおして！？」

カスミさんは立ち上がって大きな声を出してレッドに聞いた。

レッド「俺の実力が在れば、あんな奴等、敵じゃないって事！」

…… ホント、この頃のレッドって自信過剰だよな……

レッドの言葉を聞いたカスミさんは、呆れた顔をしてレッドを見た。

カスミ「敵は強大よ！思いつかない方が良いわ！」

カスミさんがレッドに忠告するが、レッドは面倒臭そうな顔をした。

レッド「しつこいなあ。やられて気絶してたのは、自分の方の癖に……。」

れ、レッド、その事は……！

カスミ「バカ……！」

カスミさんは目に涙を溜めて大声でレッドに言った。
あゝ、その事はタブーだったのに……

カスミ「レイン君！行くわよ……！」

レイン「あつ、はい。」

カスミさんにそう言われたので、俺は素直にカスミさんに付いて行った。

レッド「……な、何だよ。泣く事ねーだろ……！」

レッドがカスミさんにそう言ったが、カスミさんはレッドを無視して歩いて行った。

.....

.....

.....

.....

カスミ「それじゃあレイン君、貴方のポケモンを見せてくれる？」

レイン「分かりました。」

俺はカスミさんにそう言われたので、俺はロコンとラプラスを出した。

俺達はその後、動きやすいジャージに着替えて、ポケモンを受け取って近くの公園にやって来た。

レッドは、メイドさんとデートの約束をしていたが……

カスミ「レイン君のポケモンって、それだけじゃないでしょ？」

レイン「そうですよ……。でも、俺はこの二体をメインに戦ってますから。」

未だ、ハウエン地方のポケモンですら知られてないのに、ボーマンダ以降のポケモンを見せる訳にはいかない。

なので俺は、仕方がなく嘘を言った。

俺がそう言くと、カスミさんは何故かは分からないが納得してく

れた。

カスミ「ポケモンの育て方は人それぞれ。それに、このロコンとラプラス、よく育てられているわ。」

カスミさんはロコンとラプラスに近付いて、二体を撫でながら誉めてくれた。

ロコン「レイン、この人、凄く見る目が在るよ!!」

ラプラス「誉められると嬉しいな。」

ロコンとラプラスは、カスミさんを見ながら俺に言ってきた。

カスミ「しまった!レイン君を特訓に誘っておいて、私がポケモンを持ってくるのを忘れた!!直ぐに持ってくるね!!」

カスミさんはそう言って、走って屋敷に向かって行っった。

……うん、レッドを襲撃しに行っったな。

えっ?

何で分かるかって?

だってカスミさん、此処に来る前にちゃんとメイドさんからポケモンを預かってたもん。

まあ、この襲撃にはちゃんと意味が在るから、邪魔はしないけどな……

俺は公園のベンチに座って、カスミさんが戻ってくるのを待った。

sideレッド

俺はメイド達からポケモンを受け取り、自分の部屋に在るベッドに俯せになって転がっている。

カスミとレインは、速くにポケモンを受け取って特訓しに行っらしい。

.....

レッド「ちょっと言い過ぎたかな？」

俺は枕に置いてある皆に話し掛けた。

皆は、顔を傾けて頭に？マークを浮かべていた。

別に知らなくても良いか……

レッド「ま、良いや。特訓なんてしてられもんね。それに明日は、メイド達とデートの約束をしちゃったしね」

俺は笑顔になって、さっきのメイド達の約束を思い出しながら皆に言った。

フッ

レッド「!？」

すると突然、部屋の電気が消えた。

停電……かな？

ゴォー!!

レッド「うわ！な、何だ！？」

すると突然、嵐の様な風が俺の部屋に吹き荒れた。

俺は突然の事だったので、どうする事も出来ずに嵐に巻き込まれた。

レッド「うわあああつ！？た、助け……。」

俺が嵐に巻き込まれて助けを求めると、フシギダネがボールから出て“蔓の鞭”で俺を嵐の中心に引っ張ってくれて助けてくれた。

そして俺とフシギダネは、荷物に当たらない様に体を縮めた。

すると誰かが窓の外に行き、嵐は無くなつて静かになった。

俺は立ち上がって電気を付けて、開いていた窓の外を見た。

レッド「はあ……はあ……行つたか……。ん？これは……？」

外に出て行つた事を確認すると、俺の足元に“何か（・・・）”が在った。

俺はその“何か（・・・）”を拾って、何なのかを確認した。

レッド「ギャラドスの……鱗だ。……でも、何でこれが？」

俺はそう呟いて、モンスターボールを拾って、部屋を変えてもらう為にメイド達の所に行った。

s i d e レイン

カスミ「ごめんね、ポケモン達が未だ回復してなくて、時間が掛かったんだ。」

カスミさんは俺の前迄走ってきて、申し訳なさそうな顔をしながら俺に謝ってきた。

……レッド襲撃は無事に出来たみたいだな。

レイン「別に良いですよ。それじゃあ、時間が余り無いので始めましょう。」

カスミ「そうね!」

そして俺達は、眠たくなる迄一緒に特訓した。

No.16 俺は修業、レッドは襲撃（後書き）

次回はレッドとジム戦の話（を予定しています）

次回もお楽しみに！！

No.17 俺はジム戦、レッドは特訓（前書き）

今回は少し話を省略しています

本当にすいませんorz

誤字・脱字があれば教えてください

No.17 俺はジム戦、レッドは特訓

sideレイン

俺がカスミさんと一緒に特訓した・レッドがカスミさんに襲撃された日の翌日・・・

俺は何時も着ている白の半袖のカッターシャツに黒の長ズボンを着て、カスミさんの屋敷のメイドさんが作った朝ご飯を黙って食べている。

レッドの周りにはメイドさん達で一杯だが、レッドはフォークにウインナーを突き刺して顔の近くに持ち上げたまま何かを考え込んでいた。

多分、否、確実に昨日の襲撃の事を考えているんだろ。

まあそれは今は置いて、俺のこれからについて考えないとな

……

レッドと一緒に旅をするのも良いが、それだとレッドのポケモン達が成長するフラグを俺が奪ってしまうし……

かと言って、レッドと別れて行動したら、原作が変わってしまう恐れが在るし……

どうした物が……

「レインさん？」

レイン「……えっ？ど、どうしました？」

俺がこれからの事を考えていると、手に何かの本を持ったメイドさんが俺に話し掛けてきた。

……一体、俺に何の用だろう？

「昨日、教えて欲しいと言われた料理のレシピ、本にしてみました

わ。」

メイドさんは俺に頬笑みながら、手に持った本を俺に渡してきた。

……レシピ？

………！？

レイン「あ、ありがとうございます！！……ワザワザ本にして貰ってすいません。」

俺は感謝の気持ちで一杯になったが、直ぐに申し訳ない気持ちで一杯になった。

だって、レシピを教えて欲しいって言ったのに、まさか本にして俺に呉れたんだぜ？

誰だって申し訳ない気持ちになるって。

「いえいえ、私もレシピを教えて欲しいって言われたのは初めてだったので、少し気分が高くなって書いていたら、何時の間にか本になってまして……」

メイドさんは、顔を少し赤くして俺にそう言ってきた。

良かった、疲れてる顔はしてないから大丈夫だな。

仕事に支障が出る様なら、皆さんに俺が謝らないといけないからな……

「クスクスクス」

俺がそう思っていたら、レッドの周りに居たメイドさん達が笑い始めた。

……ジムリーダーに勝つって言って笑われたんだろう。

レッド「何で笑うんだよ？俺がリーダーに敵わないってのか！？」

レッドが少し大きな声を出してメイドさん達に聞くと、カスミさんが腕を組んでレッドの後ろからこの部屋に入ってきた。

……カスミさん、今迄何処に居たんですか？

カスミ「良いじゃない、挑戦してもらいましょうよ。いらっしやい、レッド。案内してあげるわ。」

カスミさんがレッドにそう言ったので、レッドは真剣な顔付きになった。

レイン「カスミさん、俺も付いて行つて良いですか？」

今日中にジムに挑戦して、早く教えて貰った料理を教えて貰いたい。

それにこの屋敷には、料理を教えてくれる先生が沢山居るしな……

カスミ「ええ、それじゃあ一緒に行きましょう。五分後、玄関に準備をして来て頂戴ね。」

カスミさんは俺とレッドにそう言つて部屋から出て行つた。

………

………

………

………

俺はメイドさんから貰った料理の本を部屋に置いてある鞆の中に入れて、急いで玄関に向かった。

玄関には既に準備を終えたレッドとカスミさんが居て、俺が来たので屋敷を出てジムに向かってハナダシティを歩いている。

レッド「おい、待ってよ。ジム……遠いの？」

レッドはハナダシティを見ながら前を歩いているカスミさんに聞くが、カスミさんはレッドを無視し続けて歩き続けた。

こう言う空気の事……カオスって言うのかな？

俺自身、カオスな空気を体験した事が無いから今一分からねえ。そう思いながら歩いていると、何時の間にか街外れに来ていた。

レッド「おーい！」

カスミ「……街の外れよ。」

レッドが少し困った顔をしながらカスミさんに聞くと、カスミさんは視線を俺達に向ける事無くそう言ってきた。

……機嫌が悪いな、カスミさん……

そう思っていると、俺達の目の前にジムが現れた。

カスミ「着いたわ。……さあ、どうぞ。」

カスミさんは不気味な笑み（こんな事を言ったら殴られそうだが……）を浮かべながら、俺とレッドにそう言ってきた。

レッドは頭に？マークを浮かべ、俺は特に表情を変えずにジムの中に入って行った。

ジムの中は誰も居なくて、電気も余り付いてなかった。

レッド「おい……、此処誰も居ないじゃんか。」

レッドはそう言いながら歩き続けて行くと、何事も無く最後の部屋に着いた。

レッド「カスミ！リーダーは何処なんだよ！？」

レッドはカスミさんの顔を見ながらそう言うと、カスミさんは笑いを浮かべながらレッドを見た。

カスミ「リーダーは、此処よ！」

カスミさんは、自分を指差しながらレッドに言った。

レッド「……………！？」

カスミさんの言葉にレッドは口を大きく開けて驚いた顔をした。俺は知っていたので、特に驚く事も無くレッドとカスミさんから離れた。

まあこの後の展開は知ってるから、巻き添いは喰らいたくない。

レッド「ま……またまたー。面白くない冗談扱いちゃって。」

レッドは苦笑いをしながらそう言うと、カスミさんはスターミーをボールから出してレッドを攻撃し始めた。

俺はラプラスをボールから出して、ラプラスの上に乗った。

ラプラス『えつ……と、レイン、これはどう言った状況なの？』

ラプラスが、目の前で戦っているレッドとカスミさんを見ながら俺に聞いてきた。

……うん、何て言おうか悩むんだけど。

レイン「……簡単に言えばジム戦？」

ラプラス『どうして疑問符が付いているの？』

レイン「……そこは気にしちゃいけないよ。」

俺とラプラスが会話していると、レッドが何時の間にかフシギダネを出してカスミさんに反撃したが、全くフシギダネの攻撃は喰らってなくて、逆にフシギダネがやられてしまった。

レッドがカスミさんの強さに驚いていると、カスミさんが泣き出してスターミーを撫で始めた。

そしてレッドがカスミさんの気持ちがあったみたいで、レッドも特訓に加わるらしい。

……今回の俺、完全に空気存在だな。

カスミ「そうだ！レイン君、私とジム戦をしない？」

カスミさんが笑顔で俺に提案してきた。

……わ、忘れられてなかった。

No.17 俺はジム戦、レッドは特訓（後書き）

次回はハナダジムに挑戦する話（を予定しています）

次回もお楽しみに！！

No.18 VSスターミー（前書き）

やはり、ポケモンバトルを表現するのは難しいです！

しかも、今回もレイン無双が在ります。

御了承下さい。

誤字・脱字が在れば教えてください。

No.18 VSスターミー

sideレイン

俺は今、カスミさんと向かい合わせになって立っている。

俺の前にはラプラスが、カスミさんの前にはスターミーがフィールドでお互いを睨み合っている。

何故こうなっているかというと、俺とカスミさんがジム戦をする為である。

レッド「使用ポケモンは一体、どちらかのポケモンが負けたら其処で試合終了な？」

フィールドの真ん中で審判をしてくれてるレッドが、俺とカスミさんの顔を交互に見て言ってきた。

俺とカスミさんは真剣な顔をしながら、レッドの言葉にゆっくり頷いた。

レッド「それでは……始め!!」

カスミ「スタちゃん、“バブル光線”！」

レッドが試合開始の合図をすると、カスミさんがスターミーに“バブル光線”を指示した。

スターミーはカスミさんの指示に従って“バブル光線”をラプラスに放った。

レイン「ラプラス、“バブル光線”に向かって“冷凍ビーム”！」

ラプラス「分かった！」

俺がラプラスに指示を出すと、ラプラスは俺の指示に従って“バブル光線”に向かって“冷凍ビーム”を放った。

“冷凍ビーム”を喰らった“バブル光線”は、凍ってそのまま地面に落ちた。

ラプラスは細かい動きが苦手なので、こうやって敵の攻撃を防ぐしか方法が無いのだ。

レッドとカスミさんは、俺が取った方法を見て呆氣に取られていた。

勝負中に相手の動きに氣を取られていたらダメですよ！

レイン「ラプラス、“雨乞い”！」

ラプラス『了解！』

俺は呆氣に取られている二人を無視してラプラスに指示を出し、ラプラスは俺の指示通り“雨乞い”をした。

すると、部屋に雨が降り始めた。

部屋に“雨乞い”が出来るのも、俺達だけしか出来ない事だ。

これも修業をして行って身に付けた力だ。

レッド「へ、部屋で“雨乞い”が出来るなんて……」

レッドが俺とラプラスを見ながら、驚いた声でそう呟いた。

カスミさんも驚いていたが、何故か驚いた顔より喜んでいる顔だった。

カスミ「確かに“雨乞い”はラプラスを有利に出来る技だけど、私のスタちゃんだって有利になるのよ？」

レイン「それ位、俺だつて分かってますよ。だけど、“雨乞い”を指示したのは間違つた指示では在りませんから。」

確かに“雨乞い”は水タイプの技の威力が二倍になる。

それは俺のラプラスだけじゃなく、カスミさんのスターミーにも当てはまる。

だが、俺は水タイプの技の威力を上げる為に“雨乞い”を指示した訳ではない。

カスミ「そう。……だつたら、間違えた事を教えて上げるわ！スタちゃん、“バブル光線”！」

カスミさんは不適に笑つてスターミーに指示を出すと、スターミーはカスミさんの指示に従つて“バブル光線”をラプラスに放つてきた。

しかもその数は、先程の“バブル光線”を軽く凌駕する泡の数だった。

この泡の数の“バブル光線”を喰えば、ラプラスも只では済まないし、戦いも不利になるだろう。

……そのまま戦い続けければの話だがな……

レイン「ラプラス、“雷”！！」

ラプラス『分かつたよ！』

俺がラプラスに指示を出すと、雨雲が急に黒く変化した。

レッド「な、何だ！？」

レッドは黒くなつた雨雲を見て、大声を出して驚いていた。

カスミさんもレッドと同様、黒くなった雨雲を見て驚いた顔をしていた。

ドツガアアアアアアアアアン！！！！

すると雨雲から大きな雷が落ちてきて、スターミーは疎か“バブル光線”に迄当たった。

雷が落ちた所為で、煙がフィールドを包んだ。

そして雨雲が消えると同時に煙も消え、フィールドの様子が分かった。

そこには、元気に喜んでいるラプラスと“雷”を喰らい倒れているスターミーの姿が在った。

レッド「……………す、スターミー戦闘不能！よって勝者、レイン！」

レッドが少ししてから正気に戻り、俺の方に手を上げてそう叫んだ。

俺はそれを聞いて倒れているスターミーに近付いて、“トキワの力”を使ってスターミーの怪我を治した。

レイン「悪かったな、痛い思いをさせちまって……………」

俺がスターミーに謝ると、スターミーは頭？を横に振って許してくれた。

すると、カスミさんが俺達に近付いてきた。

カスミ「レイン君、凄く強かったわ。完敗よ。」

カスミさんは笑いながら俺に手を出してきたので、俺はカスミさんの手を握って握手した。

そして握手を終えると、カスミさんはポケットから何かを出して俺に渡してきた。

カスミ「ジムバッチよ。貴方達は未だ未だ強くなれるわ。」

レイン「それは誰にでも言えますよ、カスミさん。人間の可能性が無限大なら、ポケモンの可能性も無限大なんですから。」

俺はカスミさんからバッチを受け取って、カスミさんに笑いながらそう言った。

カスミさんも、俺の言葉を聞いて「そうね。」と言って頬笑んできた。

レッド「カスミ、俺達もレインに追い付ける様に特訓しようぜ!」

レッドがニョロゾ・フシギダネ・ピカチュウを出して、俺達に近付いてきてカスミさんにそう言った。

……………決めた。

レイン「レッド?」

レッド「ん?どうしたんだ、レイン?」

俺がレッドに話し掛けると、レッドは俺の顔を見てきた。

レイン「俺、お前と暫く一緒に旅をするよ。」

No.18 VSスターミー（後書き）

次回はカントーのボックス管理者と接触する話（を予定しています）

次回もお楽しみに！！

No.19 カントーのボックス管理者（前書き）

話が長くなりそうだったので二つに分けました。

まあ今回は次の繋ぎの話ですので……

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

No.19 カントーのボックス管理者

side???

わいはカントー地方のハナダシティのはずれ岬に住んどる科学者や。

わいの研究しとる物は普通のモンと違うさかい、人気の無い此处で研究しとるんやけど……

「えらいこつちゃ。いきなり調子悪うなつてもうた!」

わいは腕まくりをして、わいが研究しとる装置の中に四つん這いになって入った。

「この“ポケモン転送マシン” ちゅう奴はデリケートやさかい、調整にも気イ使うで、ホンマ。」

わいはわいが研究しとる装置・“ポケモン転送マシン” に愚痴を言いながら、中に在る配線を調整し始めた。

ボタン!!

「!?!?しもた!!!」

するとわいの服が扉に引っかかって、ポケモン転送マシンの扉が閉まってもうた。

わいは急いで扉を叩いたんやけど、ポケモン転送マシンが勝手に起動しよった。

ああ、わいは一体どうなるんや!?

sideレイン

此処は24—25番道路・・・

俺とレッドはあの後、一週間カスミさんと一緒に特訓した。

まあその時に間違つてグレイシアが出てきて、二人にグレイシアの事がバレたので俺の手持ちを二人に公開した。

最初こそ二人は驚いていたが、直ぐに打ち解けて皆と仲良くしてくれた。

勿論、グレイシア達の事は他言無用にしてくれと言ってある。

二人はロケット団の事も在り、其の約束は絶対に護ると誓つてくれた。

そして俺とレッドはカスミさんと別れて、今は24—25番道路に来ている。

レッド「うーん、そろそろボールの持ち運びがキツくなってきたぞ。」

レッドが腰に付けているボールを見ながら、少し困った顔をしながらそう言った。

それと同時に、レッドの腰からボールが一個地面に落ちた。

レッド「張り切つて捕まえまくつたのは良いけど、この先、どーすりゃ良いんだよ?」

レイン「ポケモン転送マシンの調子が安定してないのに、張り切って捕まえ過ぎたレッドが悪い。」

レッドが俺の顔を見ながら俺に聞いてきたので、俺は呆れた顔をしながらレッドにそう答えた。

カントーのポケモン転送マシンの管理者は、この先のはずれ岬に住んでるマサキさんだったよな？

未だこの頃は調子が安定していないから、ボックスにポケモンを預ける事が出来ない。

なので俺達ポケモントレーナーは、ポケモンを捕まえ過ぎないようにしているんだが……

レッド「ポケモンが居たら捕まえなくなるだろ？」

レッド（バカor天然）は俺達とは違った。

出てきたポケモン全てにバトルを挑んでは、ボールを投げてポケモンゲットを繰り返していた。

其の所為で、レッドの腰に付けられているボールの数は10を軽く超えた。

レイン「其れはお前だけだつて。」

レッド「あつ、ボールが……」

レイン「話を聞けよ。」

俺がレッドにツツコんだのだが、レッドは下に落ちたボールを取るのに集中していたので、俺は少しいラッとしながらレッドにそう言った。

するとレッドの前に、木の枝を紐に括り付けて運んでいる一匹の

コラッタが歩いていった。

レッド「あれって……、コラッタだよなあ。でも、何か変だぞ。」

レッドは目の前に居るコラッタを見て、目を丸くしながらコラッタの感想を小さい声で言った。

……あのコラッタ、何処か人間の顔をしている様な……

俺が一人で考え込んでいると、レッドが左手にボールを構えてゆつくりコラッタに近付いていた。

レッド「きつと新種のポケモンだな。スゲエぞっ！！よし！」

……レッド、お前って奴は……

「ふいーっ、全く火起こすのも一苦労や。」

するとコラッタが立ち止まって、手で額の汗を拭きながらそう言った。

……へ？

「ホンマにこんな板切れ一つ、人間やったら一発で運べるっちゅーのにな。」

コラッタは木の枝を見ながら、独り言の様な声で愚痴を言っていた。

……MA・ZI・DE？

「「ぱ、ポケモンが……ポケモンが喋ったアアア！？」」

俺とレッドは、声を揃えてコラッタを見ながら大声を出して驚い

た。

「ひつ、人や人や！こんな辺鄙な所、誰も来てくれへんかと思たわ。」

コラッタは関西弁で俺達の顔を見ながら、嬉しそうな顔をして俺達にそう言ってきた。

……ん？

ハナダのはずれ岬に住んでいて、関西弁で話すコラッタ？

……まさかな……

レッド「あ……あ……」

レッドは関西弁で話すコラッタを見て、尻餅を付いて言葉を発せなくなっていた。

俺はどうなのかって？

最初は驚いたけど、今考えたら毎日ポケモンと話していたからな。今は至って普通だぜ。

……って、俺は誰に話し掛けてるんだよ？

「助かったあゝ！兄ちゃん、ちょっと手エ貸してや。」

関西弁のコラッタは、俺達を見て困った顔をしながら俺達に頼んできた。

だがレッドは、口をパクパクさせて全く話を聞いていなかった。

レイン「レッド、少し落ち着けつて。」

「そやったな。この格好じゃ驚くわな。」

俺がレッドに少し呆れながらそう言つと、関西弁のコラッタが右手で頭を掻きながら俺達にそう言つてきた。

「ええか？わいは今でこそこないな姿やけど、其の正体はポケモン評論家！」

関西弁のコラッタが右手で胸を叩いてエヘンとして、自分の正体を俺達に教えてきた。

……やっぱこの人が……

「岬の小屋のマサキ……」

関西弁のコラッタが自己紹介をしている途中で、遠くから現れたオニドリルが関西弁のコラッタを足で捕まえて飛んで行つた。

俺達は余りにも突然だったので、オニドリルを何事も無かつたかの様に見ていた。

「ちよつと兄ちゃん等！ボーツと見とらんで助けてえな！」

するとオニドリルに捕まっている関西弁のコラッタが、俺達を睨みながら俺達に助けを求めてきた。

レッド「助けるつたつて……」

するとレッドはポケモンを三体出して三体の顔を見ると、三体はレッドの顔を真剣に見ながら頷いた。

レイン「まあ一応助けに行こうぜ。」

俺は口コンとグレイシアをボールから出して、レッドの顔を見て

そう言った。

レッド「しょーがねえな。」

レッドは俺達の答えを聞いて、仕方がない様な顔をしてオニドリルを見た。

レッド「ま……待てー！」

レッドはやる気の無い声でそう言って、俺達はオニドリルを追い掛けた。

No.19 カントーのボックス管理者（後書き）

次回はオニドリルとの戦い（を予定しています）

次回もお楽しみに！

No.20 VSオニドリル（前書き）

先週は更新出来なくてすいません。

バイトが忙しくて更新出来ませんでした。

はあ、速くバイトを辞めたい……

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

No.20 VSオニドリル

sideレイン

俺はロコンをボールから出し、レッドはフシギダネとニョロゾとピカチュウをボールから出してオニドリルを追い掛けた。

オニドリルに捕まったコラッタ（仮）は、捕まりながらも大きな声で俺達に助けを求めてきた。

レッド「まずは、オニドリルの動きを止めなくちゃ！」

するとレッドが、オニドリルとフシギダネを交互に見ながらそう言った。

俺はロコンを見て、お互い見合って無言で頷いた。

レッド「フシギダネ、“葉っぱカッター”！」

レイン「ロコン、“火炎放射”！」

レッドはフシギダネに“葉っぱカッター”を、俺はロコンに“火炎放射”を指示を出した。

するとロコンとフシギダネは、俺達の指示に従ってオニドリルに技を放った。

だが、フシギダネが放った“葉っぱカッター”とロコンが放った“火炎放射”はオニドリルに簡単に避けられた。

……あのオニドリル、中々やるじゃねえか。

「あ、アホーっ！そないな攻撃で効くかつちゅーの！」

するとコラッタ（仮）はオニドリルの足でジタバタしながら俺達

に文句を言ってきた。

……何か助けて貰う癖に、凄く偉そうだな……

「兄ちゃん等、覚えとき。飛行ポケモン相手なら、凍らすとか痺れさすとかで、先ず翼を封じるんや。そないな草ポケモンと炎ポケモン、役に立つかつちゅーの！……何や、居るやないけ。其の二匹使いいな。」

するとコラッタ（仮）は、最初に俺達を見ながらそう言って、次にフシギダネとロコンを見てそう言って、最後にニョロゾとピカチュウを見てそう言ってきた。

……助けるの、冗談抜きで止めようかな？

ロコン『……レイン、助けないとダメなのかな？』

するとロコンが、物凄く嫌そうな顔をしながら俺に聞いてきた。俺も助けるのは嫌になってきたけど、“一応”人間で物語のキーになる？人だから助けないと……

レイン「我慢だ、我慢をしろロコン。」

レッド「助けてやろうつてのに何て奴だ！」

俺がロコンを宥めながら走っていると、レッドがコラッタ（仮）に苛立ちながらニョロゾとピカチュウを見た。

レッド、お前の気持ちは痛い程分かるから、今は我慢をするんだ。

レッド「えーい、しょうがねえ！“冷凍ビーム”！“電磁波”！」

するとレッドはニョロゾに“冷凍ビーム”を、ピカチュウは“電

磁波”を指示した。

ニヨロゾとピカチュウは、レッドの指示に従って“冷凍ビーム”と“電磁波”をオニドリルに向かって放った。

だが……

「ぎゃわわわわ!!?」

二体の技はオニドリルではなく、オニドリルに捕まっているコラッタ（仮）に当たった。

二体の技を喰らったコラッタ（仮）は、大声で悲鳴をあげた。

あゝあ、やっちゃった……

「こつちに当ててどないすんねん！死に掛けたやないかーっ!!」

するとコラッタ（仮）は、助けて貰う癖に逆ギレして俺達にそう言ってきた。

俺は今にも切れそうな口コンを抱き抱えて暴れない様にしてレッドを見ると、レッドはコラッタ（仮）を睨みながらかなり切れていた。

このままだったらレッドはコラッタ（仮）を見捨てるかも……俺ももう少ししたら……

「兎に角、空飛んでるやさかい、このままじゃ埒がアカン。止まっとこ狙うてや！」

レッド「そんな事言われたって……」

コラッタ（仮）は俺達にそう指示を出してきたが、レッドは困った顔をして空を見上げた。

俺もレッドに釣られて空を見上げると、オニドリルが飛んでいる

近くに雷雲が浮いていた。

……よし！

レイン「レッド、あの雷雲を使ってオニドリルを止めるぞ！」

レッド「ん？……！？わ、分かった！」

俺がレッドに雷雲を指さしながらそう言うと、レッドは雷雲を見て俺が何をしたいのかを分かってくれた。

レッド「ピカチュウ！」

レッドがピカチュウの名前を言うと、ピカチュウはレッドの体を上って勢い良くジャンプし、雷雲に近付いた。

そして手を上げて、雷雲の電気を操作し始めた。

すると雷雲が“ゴロゴロ”と鳴り始めて、今にも雷が落ちそうだった。

レッド「下からがダメなら上からだ！」

「無茶したらアカン！」

レッドがコラッタ（仮）に作戦を言うと、コラッタ（仮）が完全に怯えた顔をしながら俺達に言ってきた。

其の瞬間……

ドーーーーーン！！！！！！！！

巨大な雷がオニドリルに落ちて、オニドリルとコラッタ（仮）は下に向かって落ちてきた

レッド「やった！」

レッドは指を鳴らし喜び、俺とレッドは落ちてきたオニドリルに近付いた。

……流石に至近距離から効果抜群の電気タイプの技、しかも威力が上から数えたら速い“雷”を喰らったんだから、もう立てないだろ。

俺がそう思った時、突然オニドリルが起き上がった。

するとオニドリルは翼を広げ、何かの技の構えをしてきた。

この構えは確か……

レイン「レッド、ニョロゾに“影分身”を指示しろ。“ドリル嘴”だぞ、あの構えは。」

レッド「わ、分かった！」

俺がレッドに指示を出すと、オニドリルがニョロゾに“ドリル嘴”をしてきた。

「あ、アカン！兄ちゃん等、気イ付けえ！“ドリル嘴”や！」

近くの崖の上からコラッタ（仮）が大声を出して俺達に言ってきたが、オニドリルはもう目の前迄来ていた。

そして……

グサッ！！

オニドリルの“ドリル嘴”を喰らったニョロゾは、オニドリルの嘴が腹の部分を貫通した。

だが其のニョロゾは“影分身”のニョロゾで、影分身のニョロゾは蜃気楼の様に消えていきオニドリルは凍っていった。

「影……分身？」

レッド「来る技が分かったから何とかなったよ。」

レイン「俺が教えたからだろ。」

コラッタ（仮）はニョロゾが使った技を呟いて、其の呟きを聞いたレッドがコラッタ（仮）に笑顔で言ったので俺は呆れ顔でレッドにツッコんだ。

「命縮んだわ。」

コラッタ（仮）は其の場に座り込んで、溜め息を吐いて俺達にそう言ってきた。

.....

.....

.....

.....

俺達は岬の小屋にやってきて、コラッタ（仮）を人間に戻す準備をしていた。

そしてレッドが機械の機動スイッチを押した。
暫くすると機械が止まり、扉から一人の青年が出てきた。

「やれやれ助かったわ。分離プログラムは内側に居たら押せへんさかいに、困つとったんや。」

すると青年が頭を掻きながら俺達にそう言ってきた。

レッドは青年が出てきた機械を不思議そうに見ていた。

レッド「これって……？」

「ポケモン転送マシンや。ポケモンやアイテムを離れた場所に転送出来るつちゅう優れモンやでえ！」

「す…スゲエ！」

レイン「やつぱこれがポケモン転送マシンだったのか……」

青年が胸を張って俺達にポケモン転送マシンの事を説明してきたので、レッドは素直に驚き俺は感心した顔をしてポケモン転送マシンを見た。

「ところがすっかり機械に巻き込まれてしもうて、転送先に“あの”コラッタが居ったさかいに合体してあの様や。」

すると青年は自分がコラッタになった原因を言ってきたので、俺とレッドは青年を見て苦笑いをした。

「そや、挨拶のやり直しや。わいはマサキ。」

レッド「あ…俺はレッド。」

レイン「俺はレインボー、レインって呼んで下さい。」

俺とレッドは青年・マサキさんと堅い握手をして自己紹介をした。
やっぱこの人がカントーのボックス管理者のマサキさんだったか

……

レッド「俺、最強のポケモントレーナーを目指して旅をしてるんだ。」

レイン「俺はカントーのジムを制覇する為に旅をしています。レッドとは半分目的が一緒なので旅と一緒にしてます。」

するとレッドがマサキさんに旅をしている理由を言ったので、俺もレッドに続けて旅をしている理由を言った。

マサキ「最強のポケモントレーナーにジム制覇か……。凄いやないか！そらええ。助けてもらたお礼や！ポケモン評論家のこのマサキ、何でも相談にのりまっせ！」

するとマサキさんは俺とレッドが旅をしている理由を聞いて、素直に驚いて直ぐに笑顔で俺達にそう言ってきた。

マサキ「先ずは、其の重そうな荷物！」

マサキさんはレッドにそう言うと、レッドの腰に付いているボールを手を取った。

あつ、そのボールに入ってるポケモンは……

マサキ「預かつとくわ。この転送マシンで、何処に居ても即時お届けしまっせ、ダンナ。勿論、レイン君も捕まえたら直ぐに届けるで！」

マサキさんは俺とレッドにそう言つて、レッドから取ったボールを見た。

あゝあ、見ちゃったよマサキさん……

マサキ「ん？……ひっ！？お、オニドリル！？」

マサキさんはオニドリルを見て、其の場で尻餅を付いて怯えた顔をした。

其のオニドリルはさっきレッドが捕まえた奴で、十個以上在るレッドのボールから取るなんて……マサキさんは何かを持ってるな。

俺はそう思いながら、レッドと一緒にオニドリルに怯えるマサキさんを見続けた。

No.20 VSオニドリル（後書き）

次回はポケモン大好きクラブに行く話＋（を予定しています。）

次回もお楽しみに！

No. 21 ポケモン大好きクラブ会長が…（前書き）

先週はすいませんでしたアア!!

先週は体調を崩して書けませんでした……

誤字・脱字・変な所があれば教えてください。

No.21 ポケモン大好きクラブ会長が…

sideレイン

俺とレッドはマサキさんとあれから別れて、地下通路を通ってクチバシティの外れにやって来た。

レッドはポケモンからボールから出して歩いているが、俺のポケモンは未だこの頃は知られていないポケモンばかりなのでロコン以外はボールの中に入って貰っている。

レッド「スッゲー良い天気だなー！こんな日は、お前達もボールの中より外の方が良いよなあ。」

するとレッドは背伸びをして固まった筋肉を解して、新鮮な空気を思いっきり深呼吸をして吸いながらポケモン達を見てそう言った。俺も深呼吸をして新鮮な空気を吸うと、潮の匂いがしたので俺は目を凝らして前を見てみるとクチバシティと海が広がっていた。

レッド「うおーっ！！海はやっぱ広いぜ！！」

レッドも漸く海に気付いて、テンションを上げてそう言った。するとレッドのポケモン達が海を見て急に興奮し出した。

……レッドのポケモンは海を見た事が無いのか？

「はは、そう言やお前達、海を初めて見るんだっけ？」

するとレッドは自分のポケモンを見てそう言って、港に停泊している大きな船を見た。

マサラに海って無いのか？

否、在った筈なんだけどな……

「サン……ト……アン……ヌ号か。へーっ。」

レッドは港に停泊している大きな船・サントアンヌ号の名前を言
って、何かを決めた顔をして俺の顔を見てきた。

……スツゲエ嫌な予感がするんだけど。

レッド「よし、ちょっと見に言ってみよーぜ！」

レッドはそう言って、自分のポケモン達と一緒に走ってサントア
ンヌ号に向かった。

……って、

レイン「ちょ、ちょっと待てよレッド！！」

ロコン『れ、レイン、置いて行かないでよー！』

俺とロコンはそう言って、レッドを追い掛ける為に走り出した。

……

……

……

……

レッド「へーっ、やっぱりデッカいなー。」

レイン「お、お前マジフザケンなよ……ハア……ハア……」

レッドは目の前にサントアンヌ号を見てそう言っ、俺は膝に手を置いて肩で息をしてレッドにそう言った。

しかしホントにデカイ船だよな、サントアンヌ号って。

……そう言えば、急に静かになったなレッドの奴……

俺は横に顔を向けると、先程迄其処に居た筈のレッドとレッドのポケモン達の姿が無かった。

………って、

レイン「レッドの奴、俺を忘れて一人でサントアンヌ号に行きやがったアアア!!」

ロコン「レイン、ドンマイ……」

俺が大声でそう言っ、ロコンが同情した目で俺を見てそう言ってきた。

「少年よ。」

「……へ？」

俺がロコンに同情した目で見られていると、後ろから誰かに話しかけられたので俺は後ろを向いた。

其処には黒のタクシードに黒のシルクハットにサングラスと言った黒一色で包まれていて、凄い量の髭を生やした小父さんが立っていた。

………誰ですかこの人は、見た事が無いんだけど。

「腰に付けとるのは、もしかやモンスターボールでは無いかな？」

「えっ？ま、まあそうですけど……。」

小父さんは俺の腰に付いてるボールを見ながら聞いてきたので、俺は戸惑いながら其れを肯定した。

「偉い！その若さでポケモントレーナーとは見上げたもんじゃ！」

「別に珍しくも何とも無いでしょ？」

小父さんは俺の顔を見て誉めてきたので、俺は少し困った顔をしながら小父さんにそう言った。

すると小父さんは俺の言葉を聞いて、何か感じ取った顔をして俺を見てきた。

……何を感じ取ったのは分からんがな。

「ムムム……。少しも傲らぬ其の態度、益々タダモンでは無い気配じゃ。」

すると小父さんはそう言って俺の顔をジロジロ見て、俺の後ろに回り込んでボールを取ろうとした。

な！？

レイン「な、何すんだよ！？」

「どれ、ちょっとワシに其の中身を見せてみい！」

俺はラプラスが入ったボール以外のボールを回収出来たが、ラプラスが入ったボールは小父さんに取りられてしまった。

あ、新手の泥棒かよ！？

俺は小父さんに取りられたボールを奪い返す為に小父さんの胸を掴

もうとしたが、掴む前にラプラスをボールの外から出した。

……は？

「おおーっ！？す…素晴らしい！ソッチのボールも見せてくれんか！！」

小父さんはラプラスを見て感激し、俺の持つてる残りのボールも奪おうしてきたので俺は急いで鞆にボールを直した。

「ムムム、残りのポケモンは見せてくれんのか……。まあ良い、決定じゃ！君を我がポケモン大好きクラブ名誉会員に認定する！」

すると小父さんは俺にそう言っただけでラプラスのボールを返してくれた。

……この人、ポケモン大好きクラブの会長だったのかよ。

レイン「否、行き成りそんな事を言われても……あつ、レッドだ。」

俺はポケモン大好きクラブの会長に苦笑いしながら視線を反らしてそう言った時、視線を反らした先にレッドが座り込んでいたので俺は思わずレッドの名前を言った。

するとポケモン大好きクラブの会長はレッドと俺を交互に見て、走ってレッドの所に行っただけで俺と同じ会話をした。

ラプラス「えっ……と、レイン、どうしたの？」

レイン「……何でも無い、ワリイ急にボールから出して。」

俺はラプラスに謝ってラプラスをボールに戻して、鞆に直したボールを腰に付けた。

するとレッドも俺と同じでポケモン大好きクラブ名誉会員になったので、俺達は取り敢えずポケモン大好きクラブの会長に付いて行った。

No.21 ポケモン大好きクラブ会長が…（後書き）

次回はサントアンヌ号に進入する話（を予定してます。）

次回もお楽しみに！！

No.22 サントアンヌ号に進入だ！（前書き）

今回から「」の前の名前を省きます。

まあ面倒臭くなったので……

今週の木曜からテストなので、来週は更新が出来ない可能性があるので……

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

No.22 サントアンヌ号に進入だ！

sideレイン

俺とレッドはポケモン大好きクラブ会長に連れられて、ピカチュウが描かれた看板が付けられているポケモン大好きクラブハウスにやって来た。

中に入ると、沢山の人達が自分のポケモンに付いて楽しそうに雑談していた。

すると会長が近くに居た人に資料を渡した。

「これをポストに投函してくれたまえ。」

「あつ、ポケモンスタンプ！」

レッドが会長の渡した封筒に貼られていたポケモンスタンプに気付いて、何故かポケモンスタンプを見てテンションが上がっていた。

「当クラブは、わしが設立したポケモンを可愛がるクラブじゃよ。」

会長がポケモン大好きクラブの設立した理由を言ってきたので、俺とレッドは苦笑いしか出来なかった。

「会報もホレ、この通り。さあ、君達にも1冊。」

会長は俺達にそう言ってポケモンクラブ会報を渡してきた。新聞のトップ記事は『メノクラゲと入浴して感電』だった。レッドが小さい声で「何じゃそりゃ？」と呆れて言ったが、俺も呆れてたからレッドの気持ちも分かるんだけどな……

「さあ！皆注目！注目！今日から我がクラブの名誉会員となった、レッド君とレイン君じゃ。」

「ちよっ……ちよっと、俺は……」

「俺は入会してませんよ。」

会長が此処に居る会員にそう言ったので、レッドは焦りながら俺は冷静に会長に言った。

すると此処の会員の人が俺達の周りに集まってきて、ポケモン達をもみくちやし始めた。

俺は口コンしか出してないからな。

だってカントーのポケモンは口コンとラプラスしか居ないし、ラプラスは大き過ぎるから出せないんだよな。

レッドのピカチュウがもみくちやされて、かなり苛立っているが我慢していた。

『れ、レイン、た、助けてー！！』

すると口コンが涙目になりながら俺に助けを求めてきたので、俺は苦笑いしながら口コンを抱っこして助けた。

するとレッドがニョロゾの思い出を話し始めた。

俺もレッドとニョロゾみたいに関係が長く一緒に居る訳じゃないが、皆とは他のトレーナーに負けない信頼関係を築いているぜ。

俺がその事を考え込んでいたら、さっき迄騒がしかった会員達が急に静かになった。

「どうしたんだ、レッド？」

「あつ、否、戦うって言うたら急に静かになってさ……」

俺がレッドに近付いて聞くと、レッドも今一分かってない顔をしながらそう言ってきた。

「ポケモンで戦いとな？」

「だっ、だって、当たり前でしょ？」

すると会長が少し怒りながらレッドに聞いてきたので、レッドは少し会長に怯えながらそう言った。

「否、ワシ等は『ポケモン大好き』クラブじゃから、戦わせるなんて事は……」

「え、えええええっ！！！！？」

「う、煩いレッド……」

会長が戦わせなと言った瞬間レッドが大声を出して驚いたので、俺は片手で耳を塞ぎながらレッドに文句を言った。

横で行き成り大声で叫ばれたら、誰だって怒るよな？

俺は心が広いから未だ文句を言うだけだが、これがグリーンさんだったら多分喧嘩してたな。

「大変だーっ！！僕のナツシーが居なくなっただあぁー！！！！」

レッドが会長と何故か漫才的な会話をしていたら、突然会員の一人と思われる人物が勢い良く扉を開けて泣きながら入ってきた。其の瞬間、此处に居た会員たちが深刻な顔をして一気に空気が重くなった。

そして会長は「またか……」と呟いて、棚に置かれている写真立
てを見た。

「どうしたんですか？」

「会長のケーシイもね、1ヶ月前に盗まれてしまったの。」

俺が聞こうとしたらレッドが俺の代わりに聞いてくれて、会員の
一人が会長の事を教えてくれた。

そして他の人も被害が沢山出ている事や1匹や2匹じゃない事を
教えてくれた。

クチバシティ……ポケモン盗難事件……サントアンヌ号……まさ
か……？

バンツ！！

「この話、詳しく聞かせて下さい！！」

俺がキーワードを頭の中に並べて仮定を立ててみると、突然レッ
ドが机を叩いて会員の人達にそう言った。

俺も協力するんだし、会員達の話でも聞いておくか。

………

………

………

……

会員達の情報では、盗難事件は一ヶ月に一度集中して起きているらしい。

飼い主じゃなければ一体のポケモンをボールに入れるのも一苦勞だが、大量に盗んで運んでいるのが事実……
やっぱあれだよな……

「ん？レイン、船なんか見てどう……船？」

俺が窓の外に在る船を見ていると、レッドが俺に話しかけて船に気付いて何か考え出した。

「あの港の大きな船は何処へ行くんですか？」

「サントアンヌ号ですね。クチバシティジムリーダー、マチスが、グレン島に荷物を運ぶとか……」

レッドは会員から話を聞いて、顎に手を当てて考え出した。
そして少しすると、何か思い付いた顔をしてサントアンヌ号を見た。

「レイン、一緒に行くぞ！」

「嗚呼！」

「待て！！」

レッドがサントアンヌ号に向かって走り出したので俺も走り出そうとしたら会長が俺達を呼び止めてきた。

そして真剣な顔をしながら俺達に近付いてきた。
な、何か在るのか？

「レッド君、君に一つだけ頼みが在るんじゃないか。」

「な、何ですか？」

「出かけるんなら、其の間ピカチュウを抱かせてはくれんかのう？」

ドタッ！！

会長が余りにもフザケた事を言ったので、俺とレッドは転けてしまった。

全く、この人は抜けてる所が在り過ぎだろ……

結局、レッドはピカチュウを会長に預けて、俺達はピカチュウ抜きでサントアンヌ号に向かった。

No.22 サントアンヌ号に進入だ！（後書き）

今回はエレブーとの最初のバトルの話（を予定しています。）

次回もお楽しみに！

No.24 VSエレブー 其の1（前書き）

アップネエ、後少しで更新が遅れる所だった……

今回は初の二部構成？です。

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

No.24 VSエレブー 其の1

sideレイン

俺とレッドは今、サントアンヌ号の前に在る荷物の陰に隠れて船の周りの様子を伺っている。

船の周りは目つきの悪いゴツい水兵ばかりだが、其処迄嚴重に警備されている訳じゃ無かった。

だが“念に念を”や“石橋を叩いて渡れ”と言う諺が在るので、俺はレッドに指でサントアンヌ号の裏を指さすと、レッドは俺が考えた作戦を分かって呉れたのか真剣な顔をして無言で頷いてくれた。そして俺達は海に静かに入って、何とか上れそうな場所を見つけたのでフシギダネの“蔓の鞭”を使ってサントアンヌ号に進入した。

「レッド、此処は敵の本拠地だ。フシギダネ一体を此処に置いておくのは危険過ぎる、だからボールに直しておけ。」

「分かった。」

俺は小さい声で的確な指示をレッドにすると、レッドも小さい声で了解してくれてフシギダネをボールに直した。

本来原作なら此処でフシギダネを置いて進むのだが、原作通りに進まなかったらレッドは此処で最悪の場合死んでしまう可能性が在る。

なので保険を掛けてフシギダネをボールに直して貰ったのだが、やはり心配なのは心配。

なので俺はラプラスを海に出して、“白い霧”を使って身を隠して貰った。

「じゃあ、油断せずに進もうぜ。」

「嗚呼。」

そしてレッドを先頭に、此処の水兵にバレない様にサントアンヌ号を進んで行った。

.....

.....

.....

.....

俺はレッドの後を付いて行き、レッドは一つの部屋の前にやって来た。

「この部屋が怪しかったんだよな……」

レッドは警戒しながら部屋の扉を開けて、ゆっくり入って行ったので俺も部屋に入って行った。

しかし、こんな薄暗い部屋にポケモンを閉じ込めて置くなんて……やっぱロケット団は壊滅させなきゃならねエな。

「……あれ？何も無いや。さっきのは気の所為だったのかな？」

レッドは部屋を見渡しながらそう言っただけで俺の顔を見てきたので、俺は顔を横に振って知らないと言った。

俺は原作を知っているが実際に此処に来たのは今回が初めてなんだから、俺に聞かれても何も答えられねエぞ。

俺がそう思っていたら、木の箱の近くにボールが落ちていた。

……不自然だ、否、不自然過ぎるだろ。

ゲームではアイテムが落ちていても可笑しくないが、此处は現実
でしかも敵の本拠地。

敵がワザワザ俺達にアイテムを呉れるのか？

……って違う！

あれは、

「れdd「うわぁ！？」しまった！」

俺は原作を思い出しレッドに注意しようと思ったら、レッドが拾
おうとしたボール、否、ボールサイズのビリリダマが“スパーク”
を放ってきた。

俺は急いでロコンをボールから出して、レッドはニヨロゾ・俺は
ロコンに指示を出した。

「ニヨロゾ、“水鉄砲”！！」

「ロコン、“火炎放射”！！」

ニヨロゾの“水鉄砲”・ロコンの“火炎放射”を喰らったビリリ
ダマは跳ねながら逃げて行った。

ふう、一先ずこれで安心だな。

「ふうっ、焦ったぜ。紛らわしい形しやがって。おい、大丈夫か？」

「……嗚呼。」

レッドが右手で額の汗を拭きながら俺に聞いてきたので、俺はあ
たりを警戒しながらレッドに応えた。

……一気に囲まれた、今のビリリダマは囲だったのか？

バタンツ！！

すると突然、レッドのニョロゾが倒れた。

チツ、さっきのビリリダマの“スパーク”を喰らってたのか！？

「お、おい、どうしたんだニョロゾ？」

レッドがニョロゾを抱えてニョロゾに話し掛けたので、俺は急いでニョロゾに近付いて“トキワの力”でニョロゾの怪我の応急手当をした。

「フフフ。ダメージが後から来たようだな。」

すると後ろから、男の声が聞こえてきた。

俺達はその声を聞いて立ち上がりあたりを警戒すると、急にこの部屋の電気が点いた。

「水は電気を最も良く通すからなあ。」

俺は後ろを見ると、この街のジムリーダーのマチスと、この船の水兵が立っていた

そして周りには、大量のビリリダマ・マルマイン・コイルが俺達を囲んでいた。

「さあて、招かざる乗客には厳しい罰を与えるのが、我がサントアンヌ号のしきたりだね。」

マチスはレッドのニョロゾを見下しながらそう言って、不気味に笑いながら俺とレッドを見てきた。

さて、此処から一体どうやってこの状況をひっくり返そうか……

「悪戯のお仕置きにしては、ちょっと厳し過ぎたか。……サントアンヌ号へ何しに来た？」

「街から沢山のポケモンが居なくなってる。俺達は……それを調べに来ただけだ！」

マチスが睨みながら俺達に聞いてきたので、レッドが警戒しながらマチスにそう言った。

するとレッドの話を聞いたマチスと水兵達が、声を出して笑い出した。

「それが俺達の仕業だったのか？ 言い掛かりも良い所だ。」

マチスはまるで被害者の様な言い方で俺達にそう言うと、親指を自分に向けて威張った顔をした。

「俺達はなあ、平和惚けしちまってるカワイソーなポケモンを救出してやってるのさ！ 序でにその報酬としてちーっと、儲けさせて貰ってるだけだ！！ ウハハハハハ！！」

「結局やってる事は屑じゃねエか。」

マチスが意気がってベラベラと話し出したので、俺は殺気を放ちながらマチスにそう言うത്とマチスは黙り込んだ。

「……調子に乗るなよ、餓鬼。二匹だけで俺達に適うと思ってるのか？」

「思ってるんじゃないエ、事実を述べただけだよ、屑野郎。」

マチスが少し切れて俺にそう言ってきたので、俺も少し切れてマチスに言々とマチスが完全にブチ切れた。

「良いぜ、止めの一撃を喰らわせてやるよ。」

マチスがそう言つと、マチスの後ろから鎖で拘束されたエレブーが現れた。

「此奴は取り分け凶暴でな。ボールに入れる事もまま成らん。」

「ポケモンがテメエに懐いてないだけだろうが。ポケモンの所為にしてんじゃないエよ。」

ポケモンが凶暴なのはトレーナーに懐いていないだけ、ポケモンは信頼するトレーナーには絶対に懐く。

こう言つて自分の所為をポケモンの所為に押し付ける奴は一番嫌いだ。

「エレブーッ、あの生意気な餓鬼を殺せ！！」

マチスがそう言つた瞬間エレブーの拘束が外れて、エレブーは“電光石火”で俺達に近付いてきて“雷パンチ”を放ってきた。

ガガガガガンッ！！！！

間一髪、俺達はギリギリエレブーの“雷パンチ”を避けたが、“雷パンチ”を喰らった床は大きな穴が開いていた。

「“雷パンチ”の底力を見たか!!」

チツ、懷いてないとは言え、彼処迄“雷パンチ”の威力が高ければ喰らったら命の保証は無いぞ！

どうすれば……ん？

……そうだ、こうすればこの不利な状況を有利な状況に変えられる！

「レッド……」

俺は出来るだけ小さい声で、マチスにバレない様にレッドに作戦を伝えた。

レッドは俺の作戦に賛成してくれて、ニョロゾにマチスにバレない様に指示を出した。

「ロコン、“炎の渦”!!」

『分かった!』

俺がロコンに指示を出すと、ロコンは俺の指示に従って巨大な“炎の渦”を上に出現させた。

「な!?!ひ、怯むなエレブー!!」

「今だ、ニョロゾ!!」

カキンッ！！

ロコンの“炎の渦”に気を取られていたマチスは、ニヨロゾが少しずつ出していた水に気付かず足をニヨロゾが出していた水を通して“冷凍ビーム”を喰らって足を凍らされた。

俺の考えた作戦は至って簡単、俺が時間を稼ぐからニヨロゾでマチス達の足を凍らせる。

原作ではギリギリな作戦だが、今は俺が居るので成功する確率はグーンツと上がる。

なので俺はこの作戦を実行した訳だ。

「チャンス！！」

レッドはそう言って煙り玉を地面に叩きつけた。

そして俺達は、マチス達が混乱している間に部屋から出てその場から逃げた。

No.24 VSエレブー 其の1（後書き）

次回は今回の続きの話（を予定しています。）

次回もお楽しみに！

No.25 VSエレブー 其の2（前書き）

久々に長くなった。

しかし時間が危ねエ、ギリギリ間に合ったよ。

誤字・脱字・変な所があれば教えてください。

No.25 VSエレブー 其の2

sideレイン

前回の粗筋

レッドと一緒にサントアンヌ号に進入 取り敢えずレッドを先頭にして進む レッドが一回目に進入した時に怪しいと思った部屋に入る 中に入ったが何も無い 違う部屋に行こうとしたらボール発見！ 取ろうとしたらボールはビリリダマ！？ 何とかビリリダマを撃退、しかしこの街のジムリーダー・マチスとその仲間・マチスのポケモン達に囲まれる 色々と話していたが結局敵対 マチスの切り札？のエレブー登場 意外にも強かったので煙幕を使って一時退却 誰も居ない甲板で身を隠している（今此処）

「……誰も居ないな。」

俺は立てられた木の陰から廊下を見て、誰も居ない事を確認してレッドを見た。

レッドはマチス達の足止めをしたニョロゾを、苦笑いしながら撫でていた。

……何故苦笑い？

「ちっちゃい頃、ガキ大将に追い掛けられた時は、よく、ああやって逃げたっけな。」

……成る程、レッドとニョロゾは小さい頃から一緒に居るから同じ体験してたのか。

ってか、ガキ大将ってリアルに居たんだ。

俺が転生する前の世界はガキ大将は居なかったが、虐めをするグ

ループのリーダーは居たな。

それを考えると、ガキ大将の方が全然良いよな。

まあ俺は、虐めていた奴をぶっ倒して虐められていた奴を助けたから、色んな奴から嫌われてたけどな。

「……レイン、何か顔が暗いけど大丈夫か？」

「あ、嗚呼。……一度態勢を整えよう、俺のポケモン達が本気を出せば簡単に勝てるが、ポケモンがポケモンだから戦えない。だから今はロコン、フシギダネとダメージを負ったニョロゾで戦わないといけない。」

「……そうだな。」

俺が黙り込んで昔の事を思い出していると、レッドが心配そうな顔をしながら聞いてきたので、俺はレッドに大丈夫と言った。

そして態勢を整える提案とその理由を言うと、レッドは無言で頷いてくれた。

そして今度は俺が先頭になり、レッドはニョロゾを背負って息を潜めながら歩いて行った。

そして少し歩いていると、俺達を探しているコイルの大群が廊下に現れた。

しかし、此処迄コイルが居るのに俺達を見つけれないとなると

……

「アイツ、完全に俺達を誘導してやがるな。」

「……そうなのか？」

俺が小さい声でマチスの作戦を言うと、レッドが顔を傾けながら

俺に聞いてきた。

……レッド、少しは賢くなってくれよ……

「……これだけのコイルが居て俺達を未だに見つけられてないんだ、俺達をこのサントアンヌ号の何処かに誘導して倒そうとしてるんだろ。」

俺がそう言うと、レッドはハツとした顔になってコイルの大群を見た。

ホント、ほんの少しだけで良いから賢くなってくれよ……

「だけど、この作戦にワザと引っ掛かってマチスを倒そうぜ？」

「！？あ、嗚呼！」

俺が不敵に笑ってレッドにそう言うと、レッドは驚いた顔をしたが直ぐに何時もの顔になって握り拳を作って応えてくれた。

そして俺とレッドはマチスに悟られない様に無言で、コイル達の視界に入らない様にワザとマチスに誘導されて行った。

チツ、誘導されてるってのは分かっているが、コイル達を避ける事は“S A S U K E”のアトラクションみたいでシンドい。

マチスの野郎、絶対にぶっ倒してやる！

キイイイイイイ！！！！

「「うわあああああ！！！！？」」

すると突然、背後からレアコイルが“嫌な音”を放ってきたので

俺達は反射的に耳を塞いでしまった。

レッドは勢い良くニヨロゾを投げて、両手を使って両耳を塞いだ。
って、

「レッド！？」

「し、しまった、ニヨロゾー！」

俺がレッドに叫ぶとレッドは自分がした行為が分かって、ニヨロゾを捕まえる為にニヨロゾに向かって走り出した。
だが、

「おっと！」

「ま、マチス！？」

マチスがニヨロゾの右腕を掴んだので、レッドは走るのを止めて立ち止まった。

するとマチス是不敵に笑いながらニヨロゾを海に落とそうとした。

「や、止める！！」

「させるか！！」

俺とレッドはマチスに向かって走り出そうとしたが、マチスの四体のレアコイルが俺達を電気の檻に閉じ込めてきた。

クソッ、何て堅い電気の檻なんだ！！

「ガハハハハ！！有刺鉄線よりキツイ電気の檻だ！脱出は不可能だな。」

マチスは俺達にこの電気の檻の事を言って、ニヨロゾを海へ放り投げた。

あっ……

「によ、ニヨロゾ……」

レッドは絶望した顔をしながら、ニヨロゾが落ちた場所を見ながらそう言った。

クツ、幾らラプラスが外で待機してるからってニヨロゾを助けに行くのに時間が掛かる。

そして俺達の今の状況……無事に終わるなんて無理だ。

すると俺達を電気の檻で閉じ込めている四体のレアコイル達と、マチスの隣に居るエレブーが体に電気を溜め始めた。

や、ヤバイ……！

「さて、我々をコソコソ嗅ぎ回る奴等はどう言う事になるか……思い知るが良い！！」

マチスがそう言うと、俺達に向かって四体のレアコイル達とエレブーが“十万ボルト”を放ってきた。

「うああああああああああ……！！！！！！」

体に今迄感じた事の無い痛みが襲ってきて、俺とレッドは大声で悲鳴を上げた。

ヤッベエ……痛みの所為で、体が言う事を……聞かねエ……

「フン、そろそろ良いだろう。」

マチスがそう言っ指を鳴らすと、レアコイル達が海の上に移動して電気の檻を解除した。

チク……シヨウ、体が……レッド……イエロー……

俺は後悔しながら海に落ちた。

side三人称

ドボドツボーン！！

レアコイル達が電気の檻を解除した事により、その中に居たレッドとレインボーは重力によって海に落ちた。

レッドとレインボーが落ちた場所からは泡がブクブクと出ていたが、次第に少なくなっていくレインボーの方の泡が完全に無くなった。

「銀髪の方は死んだか、黒髪の方ももう直ぐ死ぬか。」

マチスは笑いながらレッドとレインボーが落ちた場所を見ながらそう言った。

ドオオオオオン！！！！

すると突然、海からレッドを抱えた“何か”が現れた。

レッドを抱えた“何か”はサントアンヌ号の甲板に下り、マチスの前に立った。

「によ、ニヨロボン!？」

マチスが驚きながらレッドを抱えていた“何か”の名前・ニヨロボンの名前を言った。

ニヨロボンは抱えていたレッドを甲板にゆっくり寝かせ、マチスとエレブーを睨み付けた。

「クソッ!! 行けっ、エレブー!!」

マチスはエレブーにそう言って、エレブーはニヨロボンに“電撃波”を放った。

しかしニヨロボンは意図も簡単に“電撃波”を跳ね返した。

「う……。ま、任せたぞ、エレブー。」

マチスは勝てないと思ったのか、先程迄出していた強気な声ではなく弱々しい声でエレブーにそう言って逃げ出した。

エレブーはニヨロボンに攻撃を跳ね返されたのが気に入らなかったのか、切れてニヨロボンに突っ込んだ。

そしてニヨロボンとエレブーは互いの手を握り合って力と力をぶつけていると、ニヨロボンは両腕に力を込めた。

「× !？」

「ん？」

エレブーの悲鳴が聞こえたのでマチスは足を止めて後ろを見ると、

エレブーが悲鳴を上げながらマチスの方に飛んで来ていた。

「なっ！？ち、 “地球投げ” ！？」

マチスはエレブーが受けた技を言うと、避ける事が出来ずにエレブーと一緒に海に落ちて行った。

sideレイン

・

・

・

・

「…………んあ？此処は何処だ？」

俺は目を覚ますと視界は青空で広がっていたので、少しパニックリながらも上半身を起こして場所を確認した。

『『『レイン（君）！！』『』『』』

すると突然俺のポケモン達がボールから出てきて、ロコンとグレイシアが俺の胸に飛び込んできた。

『レインは俺達の事を思って選択した答えなのかもしれない、だがレイン、お前が死んだら水の泡じゃないか。』

するとバンギラスとボーマンダが、俺に怒った声をしながらそう言ってきた。

……確かに、今回の事件で俺は命を落としそうになった。だが偶々運が良くて、今はこうやって生きている。

……はあ、何て俺は馬鹿な奴なんだ。

此処は漫画の世界じゃない、現実なんだ。生きていれば死ぬ事だってあるんだ、もって考えて行動しないとな。

『レイン、君はイエローちゃんと約束したんだろ？』

ルカリオが俺の手を両手で包みながら、優しい目をして聞いてきた。

……俺はイエローと約束したんだ、“必ず帰る”って。

だから、こんな所で死んでしまったら約束を破っちゃう。

「……世間から色々言われるが、皆の力を借りても良いか？」

『『『勿論だよ（だ）（です）！！』』』

「……ありがとう。」

俺は嬉し涙を流しながら、皆にお礼を言った。

そして皆と力を合わせてロケット団と戦って行く事を誓って、心配してるであろうレッドが居る所に行った。

勿論、皆にはちゃんとボールに戻って貰ったぜ？

そしてレッドが居る場所に行くと本気でレッドに心配された。

俺はレッドに心配されてまた涙が出そうだったが、フリーデインを見て気絶した会長を見て一気に冷めた。

……うん、この人は色んな所が残念でダメだな。

しかし、今日は色々濃い一日だったな。

俺は青空を見てそう思った。

No.25 VSエレブー 其の2（後書き）

今回は自転車レースに挑戦する話（を予定しています）

次回もお楽しみに！

No.26 自転車レースに挑戦するぜ(前書き)

さて、今回は自転車の話。

と言っても、レッドは殆ど出ませんがね。

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

No.26 自転車レースに挑戦するぜ

sideレイン

「出場されますトレーナーの方々は、準備をして下さい。」

アナウンスの声を聞いて、俺とレッド・その他のトレーナーがスタートラインに移動して、自転車に乗って準備を始めた。

今回、俺とレッドは“ミラクルサイクル主催サイクルレース”と言う自転車のレースに参加したんだ。

まあ何故参加したのかと言うと、優勝商品の秘伝マシンと賞金100万円にレッドが釣られて、俺は流れでレッドと一緒に参加したんだ。

このレースのルールは簡単、自転車で10kmのコースを走破して、一番最初にゴールした選手が優勝。

まあ俺は兎も角、レッドが優勝出来る確率は極めて低い、低過ぎるがな。

「良いですか？

では、位置に着いて……」

頭の中で考えていたら、何時の間にかもう直ぐスタートしそうだった。

俺はハンドルを力一杯握り、右ペダルに足を置いて、スタートの合図を待った。

「よい……」

そして一瞬の静寂がこの場を包んだが、俺は特に緊張する事無く

隣に居るレッドを見た。

レッドは何時もの頼りない顔では無く、ジム戦やロケット団と戦う時の様な真剣な顔をしていた。

……何時もそれ位真剣な顔をしてたら良いのに。

「スタート!!」

レッドに対して少し呆れているとスタートの合図がしたので、俺は考えている事を頭の片隅に置いてカー杯ペダルを漕ぎ始めた。

俺が乗っている自転車は、シンオウ地方で買ったギアを変える事が出来る結構高価な自転車だ。

なので俺はギアを一番最高スピードに出る物に変えて、レースのトップに躍り出た。

俺は不意に後ろを見ると、レッドは最後尾を地味に走っていた。

……ポケモン好きクラブ会長からお礼として貰った自転車の引換券で、無料で交換して貰った自転車だからスピードが全然出ないんだな。

さて、レッドが優勝する確率は今のではほぼ0%に成ったから、俺が優勝してレッドに商品をプレゼントするか。

そうと決まれば、今回のレースは優勝しないとダメだな!

俺は更にペダルを漕ぐスピードを上げて、二位との差を開けて走り続けた。

………

………

………

………

「……は？」

俺は目の前に在る橋と川を見て、思わず呆れた声を出してしまった。

橋は人一人がギリギリ渡れる幅しかないし、川には大量のドククラゲが居たからだ。

……成る程、このレースは“トライポケロン”でも在るのか。

トライポケロンとは、この様な障害物もポケモンを使って切り抜けるならOKなレースなのだ。

……レッドのポケモンならこのレースに最適なメンバーだが、レツドは気付くのか？

……信じよう、我等が主人公のレッドなんだ。

何だかんだ言ってやる時はやる男だ、俺は彼奴を信じて進もう！

「さっ、少し時間を食っちゃったからな、急いで行くとしますか！」

俺はそう言っただけで橋から川に落ちないように橋を渡り、全力でペダルを漕いでゴールを目指した。

そして橋を渡って少しすると、目の前には自転車のコースと看板で表示された密林みたいな森が在った。

さて、回り道しても多分首位は維持出来ると思うが、この程度の密林ならトキワの森やウメバの森の方が凄いから、この密林を通って行くか。

そうと決まれば！

「出てこい、ロコンとグレイシア！」

俺はボールからロコンとグレイシアを出して、ロコンをハンドルの所・グレイシアを肩に乗せた。

「今からこの密林を通るから、力を貸してくれ！」

『分かった（勿論です）！』』

俺が二匹に頼むと二匹は元気な声で応えて呉れたので、俺は二匹に「じゃあ行くぜ！」と行って密林の中に入って行った。

俺はギアを一つ戻してスピードを落とし、無駄なスタミナを使わない様に平坦な道を進んで行った。

するとバタフリーやコンパン・モルフォンと言った虫ポケモンが沢山現れて、俺達に襲い掛かってきた。

「ロコン“火炎放射”、グレイシア“冷凍ビーム”！」

俺が二匹に指示を出すと、ロコンは“火炎放射”・グレイシアは“冷凍ビーム”を虫ポケモン達に放った。

二匹の技はドチラも虫タイプには相性が良いので、一撃で虫ポケモン達は倒された。

勿論、森に被害を出さない程度に加減して貰ってるからな。そんな事をしながら進んでいると、漸く密林の出口が見えてきた。

「ありがとう二匹とも、ゆっくりと休んでくれ。」

俺は二匹にそう言って二匹をボールに戻し、密林を出た。

さて、後半分でゴールなんだ。

レッドの分も頑張らないとな！……って、そう言えばレッドは未だビリなのか？

まあ……良いや。

俺は急いで12番道路に向かってペダルを漕ぎ出した。

N o . 2 6 自 転 車 レ ー ス に 挑 戦 す る ぜ (後 書 き)

次回はカビゴンの話(を予定しています。)

次回もお楽しみに！

No.27 VSカビゴン(前書き)

明けてましておめでとう御座います!!

今年もよろしく願います!!

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

「どれだけ先を走ってたのさ……」

すると二位の海パン男と三位の虫取り少年が俺に追い付いて、海パン男は嬉しそうな顔で・虫取り少年は呆れた顔でそう言ってきた。此処でロコンとジャレていて10分位だから、二位と大分距離を開けていたんだな。

「しかし、何故此処で止まってるのでーす？」

すると海パン男が不思議そうな顔をして聞いてきたので、俺はロコンを片手で持って俺が凭れているカビゴンを指さした。

「此奴の所為で動けないんだよ。此処いらは水タイプで移動出来る幅が無いから足止めて訳だ。ポケモンの技を使って起こそうにも、“眠る”をずっと使っているから起きる気配は無い。……お手上げだよ。」

俺は二人にそう言って溜め息を吐いてロコンと再びジャレ始めると、海パン男と虫取り少年は俺の話を聞いて自転車を降りた。

海パン男の手持ちはヤドン、虫取り少年の手持ちはストライク、カビゴンを起こす位の技を覚えているとは思えない。

俺の手持ちは簡単に起こす位の技は何個か覚えているが、その技を使えば地形を変えたり道を壊したりしてしまうので使っていないだ。

「どうしたの？」

すると最初はドベだったレッドがやって来て、俺達に自転車を押しながら聞いてきた。

顔がスピアに刺されて腫れているが気にしたらダメなんだろう

……でも、ププッ。

『うゝ、レインによへいれていからがはいりやにゃいよゝ』

するとグツタリしたロコンが、舌が回ってない言葉で俺にそう言ってきた。

……スツゲエ可愛いんだけど。

そう思ってロコンの頭を撫でようとしたら、突然甘い匂いが漂ってきた。

俺は匂いが漂ってくる所を見たら、スピアーの蜜でベツトリしたレッドのフシギダネが居た。

ま、まさか……

「れ、レッド君、ま、まさかと思うけど……」

「レインの思っている通り、蜂蜜でカビゴンを起こす……!」

俺は怯えながらレッドに聞くと、レッドはドヤ顔で俺にそう言うて来た。

お、お前は馬鹿なのかアアア!?

そんな事したら、カビゴンが死ぬ気で追いついてくるだろうが!!
俺は急いでロコンを頭に乗せて自転車に乗ってこの場から離れようとしたら、突然大きな音が後ろから聞こえてきた。

俺はゆっくり首を回して確認すると、目がマジなカビゴンがフシギダネを睨みながら立っていた。

……に、

「逃げろオオオオ!!!!」

俺が大きな声でそう言うと、海パン男と虫取り少年は逆走して逃

げて、俺とレッドはカビゴンの足下を器用に避けてゴールに向かった。

レッド、俺と同じ方に来るなよ！！

ってか、何でお前の自転車と俺の自転車が同じスピードで走ってるんだよ！！

そう思いながら全力でペダルを漕いでいると、何時の間にかゴールが目の前に迫ってきた。

ヤバイ、このままだったら……

「皆逃げろオオオオオ！！」

俺は大声で皆に呼び掛けたが皆は何も聞こえておらず、俺たちはゴールを潜ってしまった。

なので結果的に……

「……ぎゃあああああああああ！！！！？」

カビゴンがゴールに突っ込んで、会場を破壊させてしまった。

なので、秘伝マシンはゲットしたが、100万円はカビゴンの食費と会場の弁償代で消えた。

……俺、何の関係も無い被害者なのに……

No.27 VSカピコン(後書き)

次回はシオンタウンの話(を予定しています。)

次回もお楽しみに!!

No.28 ポケモンタワー、ポケモンの墓（前書き）

ポケモンタワーに行く迄の話。

明後日から学校なので、更新が遅れる可能性があるのでご了承下さい。

誤字・脱字・変な所があれば教えて下さい。

No.28 ポケモンタワー、ポケモンの墓

sideレイン

俺とレッドは今、雨宿り出来そうな場所を探してシオントウンを走っている。

何故シオントウンに居るのかと言うと、この前参加したレースのゴールがシオントウンの近くだったんだ。

だからゴールした流れで来た的な……まあ良いや。

そんな感じにシオントウンに来たんだが、急に雨が降り出したので冒頭部分の事をしてる訳だ。

……ってか、今更だが俺は今迄誰に説明をしてたんだ？

俺がそんな事を思っていると、レッドがすれ違う人の傘に厚かましく入ろうとしていたが、すれ違うはレッドを避けてレッドは傘に入れなかった。

厚かましいレッドが悪いと思うが、幾ら何でも避け過ぎじゃねエか？

何もしてない俺も完全に避けられてるし……この町、何か可笑しいぞ。

原作知識は大分忘れたから、覚えてるのは印象に残っている部分だけだし……印象に残ってない話は完全に忘れたからな、ヤバいな。

「何だあ？この町の人、何でこんなに冷たいんだよ!？」

するとレッドが、腕を組んで町の人に呆れてそう言った。

あつ、後ろに人が……

「ホッホッホ、皆疑心暗鬼に成つとるのじゃよ。」

「うわあああ!？」

するとレッドの後ろに居た人がレッドに急に言ったので、レッドは驚いて大声を出して俺の後ろに隠れた。

……おい。

「……供養ですか？」

「そうじゃ。可愛がっていたポケモンが、寿命で死んでしまったでな……。」

お爺さんは小さな石の十字架の前にしゃがみ込んで手を合わせたので、俺が確認を取るとお爺さんは肯定して供養している理由を教えてください。

十字架には『ドードー此処に眠る』と書かれており、レッドは俺の後ろから出てきて墓の前に移動した。
俺も墓の前に移動し、しゃがみ込んでレッドと一緒に手を合わせた。

「有り難う。君達もポケモン達が大好きな様じゃな。どれ、ワシの家に来て温かい物でも飲みなさい。」

お爺さんは俺達にお礼を言ってくれて、家に来るよう言ってくれたので俺とレッドは立ち上がってお爺さんを追い掛けた。

………

………

………

……

あのお爺さんはフジ老人と言う人で、俺達はフジ老人の家に来てタオルで濡れた顔や手を拭いた。

するとフジ老人は、温めてくれたお茶を俺達のカップに注いでくれた。

「この町はの…、昔から死んだポケモンの霊が集まる場所として言われとる。そんなポケモンの霊を慰める為に建てられたのが……ホレ、あのポケモンタワーじゃ。」

フジ老人がこのシオンタウンの事を教えてくれて、窓から見える塔を見てそう言った。

つまり、あの塔はポケモンのお墓に成るんだよな？

でも、フジ老人のポケモンの墓は外に在ったよな？

何でだ？

「お爺さんは何で彼処にお墓を作らないの？」

すると俺と同じ疑問を持ったのか、フジ老人に聞いた。

するとフジ老人は、何とも言えない顔に成って顔を下に向けた。

「ワシだけじゃあない。もう誰もあのタワーに近付こうと言う者は居らん……。」

「何故ですか？」

フジ老人がポケモンタワーにお墓を作らない理由を言ってくれたが、何故ポケモンタワーに近付かないのか分からないので俺は聞いた。

「出るんじゃないよ。」

「「……出る？」」

「……幽霊じゃ……。」

……は？

「ゆ、ユーレイ!？」

するとレッドとレッドのポケモン達が爆笑し始めた。

確かに幽霊なんて非科学的だが、ポケモンだって今だに科学的に証明出来ている訳じゃない。

それに、幽霊の正体はゴースやゴーストと言ったポケモンの可能性だって在る。

だが、この町の人々が彼処迄人を避けるとなると……本当に幽霊は存在するのか？

「まあ、信じる信じないは君達の自由じゃがね。」

フジ老人は俺とレッドにそう言って、棚から数枚の写真を持って椅子に座って眺め始めた。

写真には、卵から孵った時の小さなドードーが写っていた。

「それ……、死んじやったポケモンの……。」

「そうじゃよ。……出来ればあんな所でなく、キッチンとしたお墓で眠らせてやりたいものじゃが……。」

フジ老人は申し訳なさそうな顔をしながらそう言って、レッドはフジ老人から写真を借りて眺め出した。

すると突然、レッドの顔が驚愕した顔に成った。

俺はレッドの隣に移動して、写真を覗いて見ると其処には……

「ぐ、ぐぐぐグリーン!?」

そう、レッドのライバルでもあるグリーンさんが写っていた。何でフジ老人と一緒に写真に写ってるんだ?

「その子を……知つとるのかね!?!」

するとフジ老人は椅子から立ち上がって、俺達の顔を驚いた顔をしながら見てきた。

「お、俺、この図鑑に全ポケモンのデータを書き入れる旅をしているんだけど、同じ目的で旅をしているライバルが此奴なんです!」

レッドは写真を机の上に置き、ポケモン図鑑を取り出してフジ老人にグリーンさんとの関係を教えた。

フジ老人は俺とレッドにグリーンさんの事を教えてくれた。

グリーンさんは二週間前、このシオントウンに来ていた。

そしてフジ老人と出会い、俺達と同じ様にポケモンタワーの幽霊の話聞いて、レッドと同じ様に笑いポケモンタワーに向かった。だがグリーンさんは帰って来ず、二週間も姿を現していない。

つまり、グリーンさんはポケモンタワーに向かって二週間も帰って来ていない。

.....

.....

.....

.....

俺達はフジ老人からグリーンさんの話を聞いて、フジ老人の家を出て雨が降るシオンタウンを歩いていた。

グリーンさんはこの時は嫌味な性格だけど、ルーキーのトレーナーの中だと頭一つ出てるから簡単にやられる筈じゃない。

だとしたら……

「「やっぱり出るのか、幽霊が……？」」

思わず声に出すと、レッドも同じ事を考えていたのかハモった。そして一度レッドと目を合わせて、ポケモンタワーに向かって走り出した。

「ええい！あの野郎が挑戦したつてのに、この俺様が逃げ出せるかってんだ！！暴いてやるぜ、幽霊とやらの正体！！」

「張り切り過ぎて空回りするなよ。」

レッドがそう言ったので俺は注意すると、レッドが転けそうになった。

おいおい……

N o . 2 8 ポケモンタワー、ポケモンの墓（後書き）

次回はグリーンと戦う迄の話（を予定しています。）

次回もお楽しみに！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0978u/>

ポケットモンスターSPECIAL 虹（レインボー）のトキワの力

2012年1月8日20時53分発行